

# 東南アジアでの建築との出会いと研究

奈良女子大学 古代学・聖地学研究センター  
上野邦一

## はじめに

東南アジアに所在する建築・遺跡の研究を始めたのは、意図的ではなく、たまたま参加することになったラオスのワット・プーでの発掘調査が契機である。この時の調査で瓦を発見し、驚くとともに、東南アジアの建築史研究の手掛りを得たといえる。なぜなら、瓦があるということは、木造建築があったことを意味し、長く日本の建築を研究してきたことが役に立つ、と思ったことが一点目である。また、十分には勉強していなかったが、東南アジアの建築をざっと学ぶと、瓦に着目した論稿は乏しく<sup>1)</sup>、瓦に着目した研究は、この地域の建築・遺跡の研究に寄与するだろうと予想した点が二点目である。ただし、最初のラオス滞在のときには、東南アジアでの瓦の研究を思いついた程度で、その後の展開と研究の意味は予想できなかった。

東南アジア建築を知る最初の手掛りは、あるいはこの地域の建築を大まかに知るために最初に手に取る書籍は千原大五郎さんの『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』<sup>2)</sup>だろう。彼が記述したのは1982年だから、そのとき以降に研究の深化はあるものの、この著作はこんにちでも基礎文献として欠かせない。

さて、私が東南アジアで関わった調査を時間系列で早い順に取り上げ、そこでの問題意識や成果を、あるいは失敗を述べていくことにする。こうした経験を述べておくことが、次の世代の研究に資することができれば望外の喜びである。

## 1 ラオスのワット・プーでの発掘調査

ラオス南部に所在するワット・プーでの発掘調査は、1989年の12月から2カ月と2週間ばかりであった。この調査に関わったいきさつや初めての東南アジアのあれこれは拙稿「ワット・プー遺跡との二ヶ月」<sup>3)</sup>を参照していただければ幸いである。ただし、この拙稿の中には、学術的な考察は書いていない。その後、1993年と1996年にワット・プーの調査・見学をしたが、いったんラオスと私の関係は途切れた。2002年にワット・プー周辺で、クメール時代の王道を調査を行ったが、ワット・プーに立ち寄ることはなかった。2001年にワット・プーとその周辺地域は世界遺産に登録され、2016年に、世界遺産登録後としては初めてワット・プーに訪問した。

さて、ワット・プーで発掘調査を開始して、すぐに瓦が出土することに驚いた。ワット・プー遺跡は一見して石やレンガでできているので、屋根も石やレンガで出来上がっているだろう、瓦は出土しないと思っていたからである。瓦が出土することは、木造建築があったことを意味し、石造・レンガ造のイメージが強かったので、驚いたのである。瓦が出土すると、なぜ木造建築があったことになるのか、両者の関係を述べておく。瓦は、屋根を葺く材料で、勾配のある屋根の存在を示す。勾配のある屋根をもつ建物が所在する一帯は、降雨がある気候であることを示す。建物の構造には大きく言って二つのタイプがあり、一つは垂直材と水平材を組み合わせて構造体

とする軸組構造（じくぐみこうぞう）で、木造の大半はこの軸組構造である。他方、石造やレンガ造は、素材を積み上げて構造体とする組積構造（そせきこうぞう）である。組積構造であっても、屋根が必要で勾配屋根を設置するとなると、前近代では木造以外には素材がない。長い間隔をあげ上からの荷重を支えるには、真正アーチ<sup>4)</sup>以外では木造しかない。瓦が出土すると、屋根を支える小屋組は木造になっていたことを示唆するのである。組積構造で、真正アーチやコーベルアーチで空間を覆う場合は、木造部分がなく瓦は出土しない。

さて、ワット・プー遺跡で出土する瓦には二種類があり、丸味を帯びた瓦と、平たく両側で立ち上げ部分がある瓦であることがすぐわかった。これは、東アジアでいう本瓦葺（ほんがわらぶき）に相応し、丸瓦・平瓦だと判断した。ただ、日本を含む東アジアの瓦との違いがあり、ワット・プーで出土する丸瓦も平瓦も下面に突起があり、棧に引っかけて葺くことが理解できた。東アジアの古代の本瓦葺は、垂木の上に野地板とか杉皮とかを置き、その上に土を置き、土の上に瓦を置いていく葺き方で、下面に突起はない。中国の瓦とその系統である東アジアの瓦には下面に突起がなく、クメールの瓦は下面に突起を持つので、クメールの瓦は中国の系統ではないことを示している。では、どういう系統かが問題となるが、後述する。

私は、目の前で出土している瓦と東アジアの瓦との形状の違いと、瓦の葺き方の違いはすぐに理解できたが、一緒に調査していたラオスの考古学者は理解できない様子だったので、日本の古代の本瓦葺を図入りで講義し、日本の本瓦葺と出土している瓦との違いも伝えた。ラオスにはクメールの遺構で当時の瓦葺が残っている事例はなく、研究も乏しいので彼らが知らないのは当然ではあった。私の説明で、瓦の様相を理解できたようだった。ワット・プーで現存している建物を見ると、大半は屋根がないことに気づいた。屋根を失っている建物は、木造部分を失っていることを反映して屋根がないことになったと理解できた。

さて、発掘調査では、通常の丸瓦・平瓦の他に飾瓦に相当する文様を持つ瓦が出土していて、形状から丸瓦の先端を飾る軒先瓦だと判断できた。この軒先瓦の文様は蓮の花びらをあしらったものであった。ラオスの瓦は早くて7世紀・8世紀と考えられたから、先行する瓦の製造技術を学んでいるはずで、この蓮の文様も、オリジナルがあるだろう、と調査中は考えていた。帰国後、瓦を専門とする考古学研究者に問うと、見せた文様を日本では見たことがない、さらに朝鮮・中国にもないと言う。そこで、インド・スリランカの文様を調べてみると、南アジアにもないということが分かった。そこで、クメール建築に特有の蓮文様だと判断し、クメールロータスと呼ぶことにした<sup>5)</sup>。

クメールロータスの文様の手掛りは、蓮の花全体を文様にした扉飾りや、後にカンボジアで全形の蓮の花の文様を見て確定した（図1-1）。ワット・プーやクメールの遺跡で出土する軒先瓦の文様は、日本での単弁・複弁と区別する分類に従えば、クメールロータスの単弁ということになる（図1-2）。日本の蓮の花の文様には、単弁、複弁に二タイプがあり（図1-3）、クメールロータスは管見するかぎり、単弁である。

さて、クメールの軒先瓦は、先端がL字型に上がるタイプであるが、中国系の軒先瓦は先端がL字型の逆に下がるタイプである（図1-4）。突起がある点と併せて考えると、クメールの瓦は中国から伝来した系統ではないことは、明らかである。建築意匠がインド・スリランカに由来するとなると、瓦の文様も南アジアからの伝来の可能性がある。ところが、調べてみると、ワッ

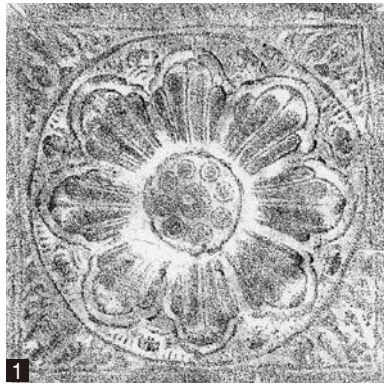


図1-1 扉飾り：筆者作成

1-1-1 ワット・プー、1-1-2 コンボンスバイ、大ブリア・カーン

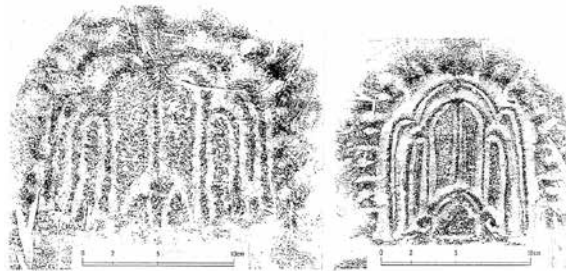


図1-2 ワット・プー出土軒先瓦：筆者作成

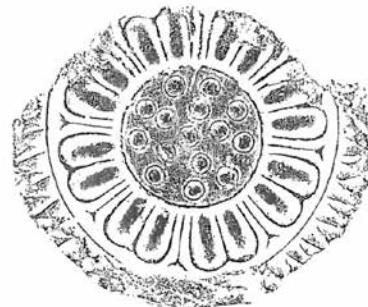


図1-3 単弁・山田寺：『山田寺発掘調査報告』（奈良文化財研究所、2002）  
複弁・川原寺：坪井清足『飛鳥の寺と国分寺』（岩波書店、1985）

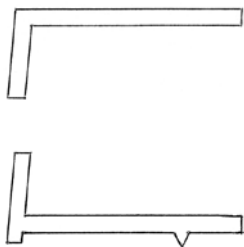


図1-4 上：東アジア 下：ギリシャの  
軒先瓦断面模式図：筆者作図

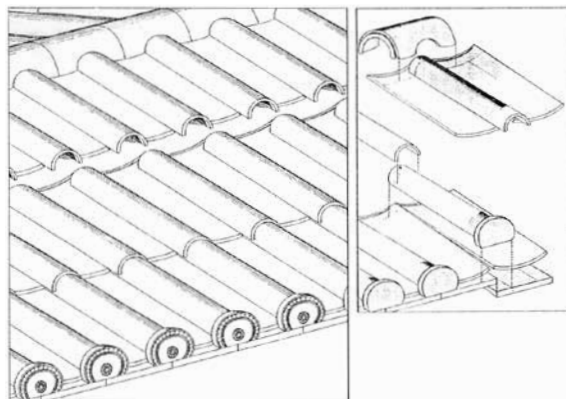


図1-5 ギリシャの軒先瓦の一例：  
『Greek Architectural Terracottas』



ト・プーで出土した蓮文様の源となるような文様はインド・スリランカにはない。ベトナム南部のオケオ遺跡ではローマコインが出土している。そこで、思い切ってローマ、ギリシャを調べてみた。すると、ギリシャ神殿の多くは勾配屋根で瓦を葺いていたことを知り、軒先瓦があり、その形状をみると先端が立ち上がっている（図1-5）。クメールの軒先瓦と造り方の技法は一致するのであった。このことを考察して一編の論稿をまとめた<sup>6)</sup>。軒先瓦の形状はギリシャ・ローマ系統としても、文様はクメール独自で、その起源を探る課題は残っている。

ワット・プーはクメールの遺跡であるので、クメール遺跡の中心であるカンボジアのアンコール遺跡群を知る必要があることや、ワット・プーはアンコール・ワットよりも古い時期の建物とも考えられたので、アンコール遺跡群に遡る遺構の観察も必要になってきていた。カンボジアにはアンコール遺跡群に先行する遺跡も多く残っていることを知り、それらも観察することも必要であることも明らかになり、課題となった。ある遺跡の意味・位置づけは、周辺のあるいは同時期の他の遺跡と相互に比較検討しないと分からない。一つしかない遺跡とか、類例がない遺跡というのは、価値判断が難しいのである。その意味でワット・プー遺跡の意味・価値を知るためにも、カンボジアほか周辺諸国に所在するクメールの遺跡を見るのは必須であった。

ワット・プー遺跡の話に戻ろう。

発掘調査の合間にワット・プー遺跡周辺の航空写真を見せて貰う機会があった。この航空写真（図1-6）を見ると、ワット・プーの東に樹木が密集し列状あるいは線状を呈して、方形を形づくっていることを発見した。方形の都市遺跡があり、その外壁の痕跡だろうと推測した。

この航空写真を入手しようとしたが、一回目の滞在中は許可されなかった。外国人が地図・航空写真を手に入れるのは厳しい時期であった。二回目のラオス訪問では入手できた。日本の国土

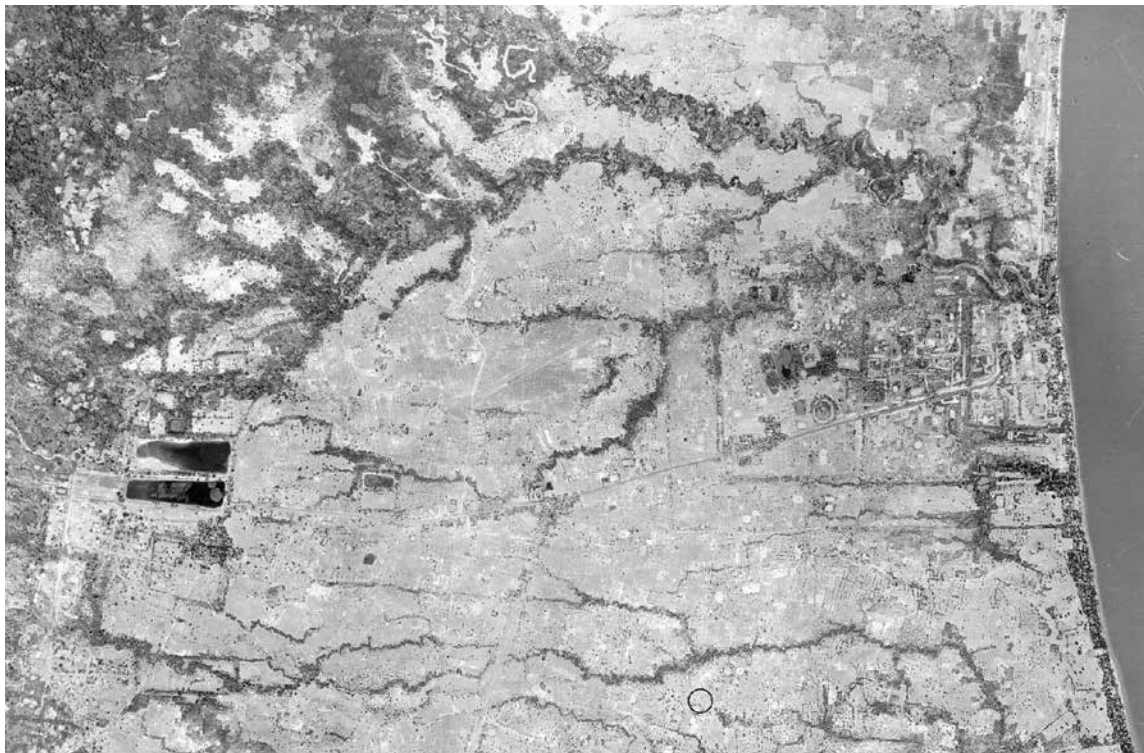


図1-6 ワット・プー周辺航空写真：ラオス 国家地理局で購入

地理院にあたる官庁へ赴き、手続きとしかるべき対価を払うと簡単に手に入った。現在はグーグルマップで、この一帯の航空写真を見ることができる。

航空写真を見ると、方形の古代都市遺跡の様相が分かり、この都市遺跡については漢籍史料にも記述があると教えられた。帰国して隋書82巻の関連史料を一読してみた。隋書を読むことによって、漢籍史料の存在と、そこに東南アジアにかかわる記述があることを知るとともに、欧米人よりも漢籍史料を原文のまま利用できる日本人の研究の有利さを感じた。

ワット・プーに現存する建物の名前をラオスの研究者に聞くと、主祠堂、図書館、ストゥーパ、南北宮殿という答えが返ってくる。しかし、これらの名は、当初からの名とは考えられない。フランス人がカンボジアでのクメール遺跡研究の際に名付けた建物の名をワット・プーにも当てはめたのだらうと考えられる。図書館はフランス語のビブリオテークを英訳しライブラリーとし、さらに日本語に直訳した結果だが、最近経蔵という訳で定着している。

ワット・プーでの調査中、ラテライトという建築資材を知った。ラテライトについては、当初は素材と名前しか分からなかった。帰国してから、ラテライトは漢字では赤土と書き、本来は土で鉄分を多く含み、地中深くにあり、地中にあるときは容易に切りだせるが、空中に放置しておくと硬化し石材のようになる、ことなどが分かった。ラテライトは、東南アジアでは、広く建築の構造材料として使われていることも知った。

瓦の文様を取り上げても、南インド・スリランカの瓦を探らねばならない、という事情を知り、東南アジアの瓦が南アジアの瓦と関連性があるなら建築の意匠や構造にも関連があることが考えられ、南アジアの遺跡も視野に入れて考察を進めることが必要であると知った。さらに、海のシルクロードの存在を知りその様相を知ることや、この地域の古代史の理解が、ワット・プー遺跡の意味を知り考察する上でも不可欠であることが分かってきていた。

ラオスでの文化遺産の修復は、現地の技術をベースにして進めることを提言した。このことは、最初のラオスでの経験以降も、各国で文化遺産保護について交流する場を得た際には同じ発言をしてきた。1989年の発掘調査は、ワット・プー遺跡の修復工事に先立つ調査であったが、その後聖牛殿の修理は行われ、2016年に訪問した際には南宮殿を修復していたものの、全域の本格的で継続的な修復はまだまだのようである。ワット・プー周辺には、ホーン・ナム・シダ、ウ・ムンなどの寺院跡があり、ワット・プーと一体となっている遺跡として世界遺産に登録されている。このうち、ホーン・ナム・シダは、韓国の協力を得て修理工事が始まっている。

ワット・プーで考えたあれこれは、その後の東南アジアの遺跡・建築を考える出発点となった。

2002年にラオスを訪れた際、パクセの南60kmほどのところある、ワット・プー・アサを見学した(図1-7)。フレク状の石を用いて、壁・祠堂・ストゥーパなどの建物を構築している遺跡で、東南アジアでは見たことがない構造体である。プー・アサの頂部の岩盤の平坦地に位置し、登るの



図1-7 ワット・プー・アサの鳥瞰写真：“Kingfisher Ecologie”のHPから

はもちろん徒歩も可能だが、下の集落から象で登ることが多い。この時に、初めて象に乗った。造営時期を18世紀とする説明もあるが、根拠がないけれども、もっと古いのではないか、という印象を持っている。主祠堂はヒンドゥー教、しかしストゥーパがあるので仏教の、二つの宗教の要素を持っている。また、全体を区画する壁は、いわば柱を並べた様相のもので、こうした壁も事例が少ない。



図1-8 ルアンパバーンの町並み：筆者作図

話が前後するが、1993年、二度目のラオス訪問の際、ルアンパバーンを訪れた。かつては、カタカナ表記でルアンブラバンと記述していたが、昨今はルアンパバーンと表記するらしいので、そのように従う。ルアンパバーンは1995年にラオスで初めて世界遺産に登録されている。ルアンパバーンへの二回目の訪問は2016年12月で実に20年ぶりに近い再訪であった。初回の訪問の時には、静かなラオスの古都の印象が大きい（図1-8）。行きかう、少数民族の衣装も珍しかった。

ルアンパバーンへの二回目の訪問では、20年間の大きい変化に驚いた。すっかり観光地になっていて、外国人観光客も多い。少数民族が町を歩く姿は見かけなかった。文化遺産を多く持つ都市、あるいは文化遺産となっている都市では、文化遺産を保護する活動と地域の活性化の活動とをバランスよく進めるのは、東南アジアでの歴史的都市での共通の課題となっている<sup>7)</sup>。

## 2 アンコール遺跡群とバンテアイ・クデイ

ラオスのワット・プーでの発掘調査の後、まずカンボジアのクメール遺跡を、アンコール・ワットを見ておく必要があった。ワット・プー遺跡はカンボジア人が造った寺院であるから、カンボジア人の文化が繁栄した結果、関連遺跡が集中するアンコール遺跡群を見る必要があったのである。上智大学がアンコール遺跡で調査を開始するというのを聞きつけ、参加させてほしい旨を伝えると、ワット・プーで発掘調査の経験をふまえて、アンコール地域でも発掘調査を行い、かつ若い研究者の人材養成にも参画できるなら、参加してもよいという返事を頂いた。もちろん、条件に異存はなく、バンテアイ・クデイでの発掘調査を行うことになり、その後20年近く続くことになった。

アンコール遺跡群のうち、バンテアイ・クデイという寺院で1981年以来、発掘調査を続けてきた<sup>8)</sup>。1981年の発掘調査は、アンコール地域での初めての発掘調査であると告げられた。1981年の発掘調査に参加し、その後は毎年、年数回、2010年ころまでバンテアイ・クデイで発掘調査を行った。その結果、カンボジアでの延べ滞在日数は600日を越えていた。バンテアイ・クデイでの発掘調査では、私自身がクメール遺跡群を理解することも大事であったが、カンボジア人の人材養成・教育も大事であった。

1994年からは建物 D02<sup>9)</sup> 付近に、1997年からは建物 D11付近に、トレンチを設定している（図2-1）。2000年から2001年にかけて、D11の南で首と胴部を分離した仏像など274点が出土したことは大きな成果の一つで、報告や論稿がある<sup>10)</sup>。



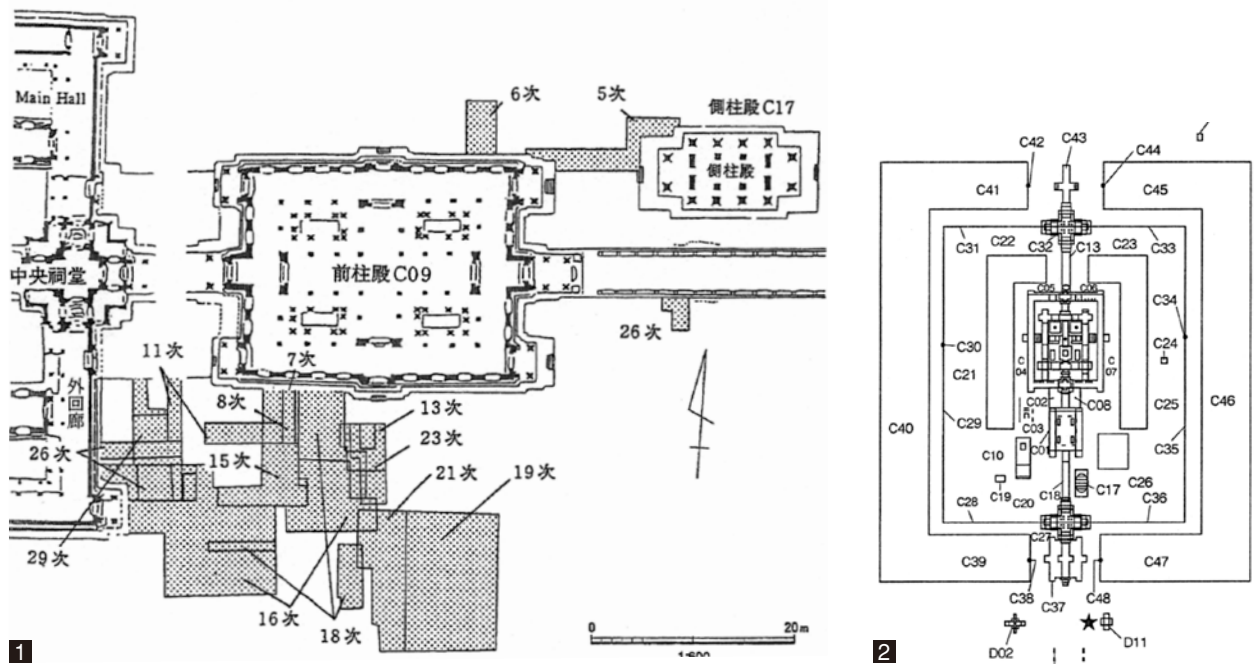


図 2-1 2-1-1 バンテアイ・クデイ発掘調査位置図01：『アンコール・ワットを読む』  
 2-1-2 発掘調査位置図02：筆者作成 ★が発掘地点

カンボジアへ行くことが増えたが、最初の数年間は往来が大変だったし、現地で生活していくことが自体が容易とはいえない状況であった。シェムリアップには、外国人が宿泊するホテルは数軒のみだったし、プノンペンでも事情は同じだった。アンコール遺跡群の見学も自由ではなかった。幹線道路から数百 m 離れた遺跡を見に行くにも、調査団長の石澤先生の許可が必要だった。現在のように、ほぼ全域で自由に遺跡を見学できる状況は隔世の感がある。

クメール建築の復原に関して、バンテアイ・クデイの一建物の復原を試みたことがある。バンテアイ・クデイの中にある C03 の周辺の発掘調査の成果を生かして C03 の復原案を提示した<sup>11)</sup> (図 2-2)。この復原案を見たアンコール遺跡で修理に携わるフランス人建築家が、私の復原案を評価してくれた。それまで彼は、アンコール遺跡についての知識が不十分である私が、アンコール遺跡群の建物についての研究を進めることに懐疑的であったようである。私が示した復原案は、コーベルアーチの屋根と木

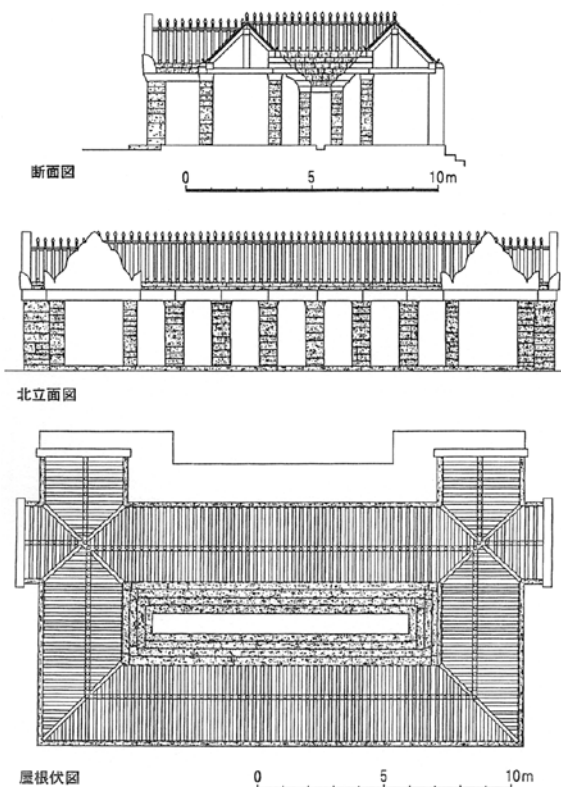


図 2-2 C03建物復原図：筆者作成

造瓦葺屋根とを混在させる案で、一見奇妙であるから、建築に精通しないと納得できない案なのである。復原する過程で考察を述べたが、混在させないと、発掘調査の結果や残っている遺跡と合致しないので、一見奇妙な復原案になったのである。こうした一見奇妙な建物で現存しない建物であっても過去に存在した可能性があり、私の案は発掘調査の成果と地上に残っている建物の部分と整合性があると評価してくれたのであった。

クメール建築では、現存しないが、かつて木造構造の屋根が多くあったことが、瓦が出土していることから分かる<sup>12)</sup>。また、碑文からも木造建築があったことは確実である<sup>13)</sup>。クメール建築の周辺での発掘調査を行うと、軒先の飾瓦が出土する。この飾瓦は、丸瓦の軒先端に置いていたと考えられる瓦で、多くの瓦葺では軒飾瓦を置いていた(図2-3)。ただ、軒先を飾る瓦の内、日本風にいえば軒丸瓦に相当する軒瓦は出土するものの、軒平瓦に相当する軒先瓦がない地点が多く、この場合平瓦の先端に飾瓦を置かないことが考えられる。

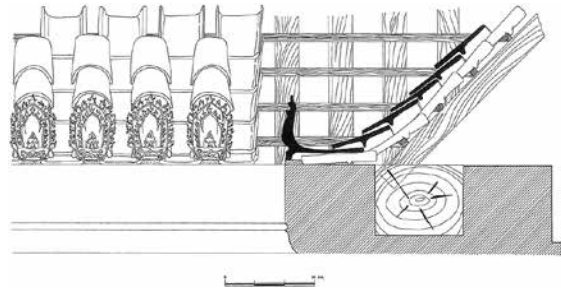


図2-3 クメール建築の軒先想定図：J. デュマルセ『クメールの小屋組と瓦』（フランス極東学院考古学報告Ⅷ、1973）

ちなみに、日本の古代にも、軒丸瓦はあるものの軒平瓦がない寺院遺跡の事例がある<sup>14)</sup>。

1995年3月の15次調査はC03近くで発掘調査を行い、トレンチの一部を深く掘り下げ、地山を確認しようとした<sup>15)</sup>。トレンチで地表面から3mほど掘り下げても厚い綺麗な砂層で、地山かと思いかけたら、3mほど下で土器片を発見し、この分厚い砂層が人工的に形成された層であることがわかり驚いた。厚さ2mほどの砂層でしっかりと固めていたのである。砂岩・ラテライトの構築物を積み上げる前に地盤を強固にするために砂層を造ったのであった。その砂層は、造営しようとする寺院の広範囲にわたって施してあることになり、その土木量の膨大さは驚嘆するしかない。一方、クメール人が、建物を構築するには地盤を強固しておく必要を認識していたことをも示す。

アンコール遺跡群にはコーベルアーチで屋根に石を用いているのに、表面を瓦葺の様相に彫り込んでいるものが多い(図2-4-1)。レンガ造、石造の建物が主流になる以前に木造建物が存在



図2-4-1 石で覆い瓦葺を表現する事例：筆者撮影



図2-4-2 桁があった痕跡：筆者撮影



していたことを示し、それらの前身建物の意匠を受け継いだと考えられた。また、遺跡の中に桁の痕跡があり、梁から上は木造であった建物が多くあることが分かっている（図2-4-2）。

アンコール遺跡群は規模が大きいといわれる。しかしよく見ると、建物一つ一つは意外に小さいのである（図2-5）。小さい建物を組み合わせることによって規模を大きくし、大規模な構築物であるかのように見せるのである。山腹に立地する寺院や、ピラミッド状に土壇を築き、そこに建物を置くのも、同じ考えによるのであろう。小さい建物を組み合わせる、という記述が分かりにくいので、模式図（図2-6）を示して説明する。

模式図は架空の寺院バンテアイ・UXである。中心の祠堂Sと表示した1棟と、回廊の四隅に塔状の建物BのA-Dの4棟、各辺の回廊の中央にゴープラGが4棟、回廊はC1-8の8棟の合計17棟から構成される。建物が連続しているとき、どこからどこまでを一つと数えるかは、厳密には難しいことがある。一般的には、ある一体となった構造で、屋根がまとまって一つの場合を建物一つ（1棟）と数える。屋根が複雑で、複数の建物のように見えても、構造体がまとまりであれば、一つの建物である。逆に、内部が一体となっている空間な

のに、構造体が別であれば複数の建物と数える。さて架空の寺院バンテアイ・UXを訪れる人間は、通常は建物を分解して理解することはなく、全体を一体と見て寺院バンテアイ・UXと認識する。相当の規模の寺院と認識し、個々の建物を分離して考えることはない。しかし、前述したとおり、模式図に示したように建物を分けて考えることができる。塔状建物BのA-Dは、回廊につながるが、それぞれ独立した建物であり、同様にゴープラGのE・W・N・Sの4棟も回廊とは構造を別とする建物である。回廊は塔状建物BやゴープラGをつなぐが、回廊の構造体もBやGに依拠せず、独立して建つことができる。このように見てくると、バンテアイ・UXは全体を見ると、相当の規模の寺院ということになるが、小さい建物を組み合わせた結果であることが理解できよう。クメールの寺院の規模は、このように小さい建物の集合なのである。ちなみに、

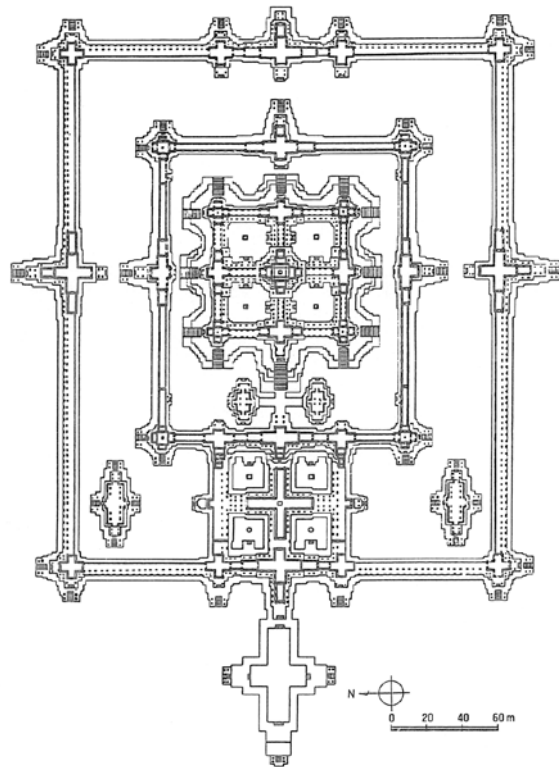


図2-5 アンコールワット：千原大五郎『東南アジアのヒन्दウー・仏教建築』

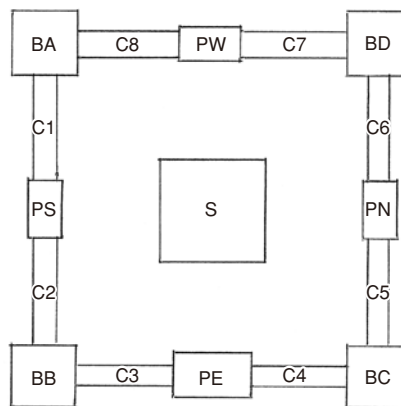


図2-6 遺跡模式図：筆者作図

日本の規模が大きい建物として著名な奈良・東大寺の大仏殿は床面積約2,900㎡、京都・知恩院の本堂は約1,500㎡であるのに比べると、アンコール・ワットの中央祠堂は四辺の前室を含めても120㎡ほどである。1棟の建物規模の違いが分かって頂けると思う。

帰属が問題となっていたプリア・ヴィヘールへ訪れた最初のときは、タイ側から入り見学した。ここでは屋根を失っている建物が多くあり、それらは木造小屋組をもっていたことが知られた。構造体の壁の頂部に梁の大入の痕跡があったから、梁は木材で、その上に小屋組を組んでいたことが想定できた。

さて、アンコール・ワットという名称は現在そう呼んでいるのであって、寺院が造営された当時、どう呼ばれていたかは不明である。アンコール地域で造営当初の寺院の名称が分かっているのは、ワット・バッチュムぐらいだといわれているし、タ・ケウは碑文から“ヘーマスリングギリ”という名称であったことが分かっている。他の多くの名称は植民地時代にフランス人が遺跡の名を尋ねて現地カンボジア人が答えた名が現在の名である。カンボジアの大半の寺院の名称は、当初の名が分からないのである。この点は日本とは大いに違う。寺院跡の研究、建築史の研究にとっても文字の存在、史料の存在の差が大きいことが分かる。寺院の名ばかりではなく、寺院の中にある個々の建物の当初の名前が分かっている。ワット・プーで前述したように、個々の建物の名はフランス人がカンボジアで遺跡の調査研究活動を始めてからの名前だと考えられる。遺跡の名や建物の名が、当初どうであったかが分からないことは、遺跡の正確な理解を妨げている。建物配置が違っていても、性格が同じ寺院かもしれないし、逆に建物配置が似通っていても、性格は異なる寺院かもしれないのである。

アンコール遺跡群では未完成の寺院が多い。タ・ケウのように数代の王が完成を目指した寺院もあることが知られていて<sup>16)</sup>、完成を目指した造営活動が分かる事例である。しかしアンコール遺跡群で未完成の遺跡が多いということは、先代の王が造営を開始し、未完成であっても次代の王が造営を引き継ぐことは少なく、次代の王は、新たに自らが主体となる寺院の造営を行うのが通例であった、と考えられる。

日本では、山田寺のように舒明十三年（641）に造営を開始して、皇極二年（643）金堂を建立するほどまで工事が進行したが、大化五年（649）に造営主体の蘇我倉石川麻呂が自害する事件の後、造営活動は一時中断し、そのあと天武二年（673）造営活動が再開し天武十四年（685）に至って完成する例がある。

クメールの遺跡・建築を考え始めて、すぐに王墓が明らかでない、ことに気づいた。王墓が発見されていないのか、無かったのか、にわかには決めがたい。プレアンコールの時代に9代、アンコールの時代に26代の王の在位が分かっている<sup>17)</sup>、王墓が一つも分かっていないというのは、王墓を造っていない可能性が高い。では、あれだけの壮大な寺院を造営しながら、王墓は造っていないのだろうか。中国、朝鮮、日本などの東アジアでは、王墓が造営され多くが分かっている。東南アジアでは、近現代の王墓はカンボジアばかりでなく、インドネシア、タイ、ミャンマーでも分かっているが、前近代の王墓は分かっているし、またベトナム李朝とそれ以前の王墓も分からない。東南アジアに影響を与えたインドでも王墓は不明確である。とすると、王墓を造営しない文化があり、そういう文化圏が南アジア・東南アジアにあると想定すべきなのだろうか。

ポスト・アンコール期に仏教テラスと呼ばれる平坦地が主祠堂の前などに造られる。一例として西トップ寺院を挙げておく（図2-7）。このテラスには、両端に礎石などがあり、木製柱を立て、テラス上に木造建築が建っていたと考えるのが順当ではある。しかし、問題がある。柱と柱の間、日本語でいう梁間が6m-7mとなり、この梁間だと簡単には木造建築は建たない。さらに、西トップ寺院のように瓦が出土し、テラス上に瓦葺木造建築があったとすると、瓦葺に対応できるだけの構造体を考えなければならず、想定が難しい。

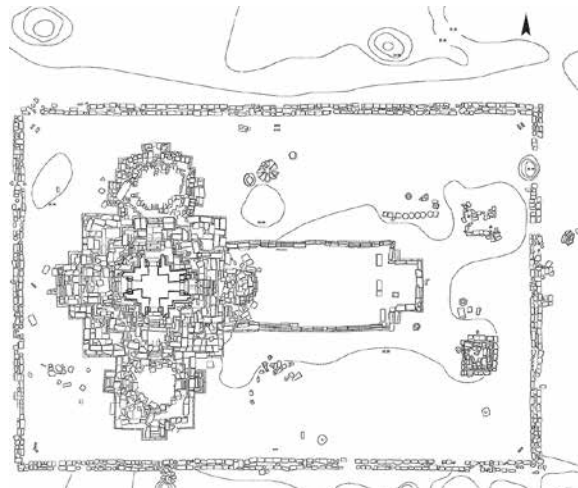


図2-7 西トップ寺院平面図：『西トップ遺跡調査報告』（奈良文化財研究所、2011）

また西トップ寺院では、北祠堂基壇下で、2016年に方形の穴の壁をレンガで造る遺構が発見された。祭祀を行っただろう、という以外には詳しいことは分からない。この発見のように、未知で未解明の遺構はアンコール地域でこれからも見つかる可能性は大いにある。

### 3 タイでの遺跡調査

ラオス、カンボジアでクメール遺跡を研究し始めて、タイにもクメール遺跡が所在していることを知ったので、この国でのクメール遺跡を見ておくことが課題となり、機会を得て調査した。1990年には、ラオスの帰途ロプブリに寄り、その後1991年に東北タイと呼ばれる地域を訪れた。東北タイ一帯はかつて、アンコール王朝の支配地域であったので、ピマイ、パノムルン、ムアンタムなどの多くクメール遺跡があり、またタイ西部にはムアン・シン遺跡も所在する。タイでは大規模遺跡を歴史公園としていて、多くのクメール遺跡やスコタイ、アユタヤが歴史公園になっている。歴史公園はタイの政策であり、タイ全土に現在10カ所ある。このうち8カ所の歴史公園へ訪問している。

アンコール王朝が栄えていたころ、タイでは13世紀中頃にスコタイ王朝、その後14世紀中頃にアユタヤ王朝が起り、アユタヤとクメールとは何度も戦闘を交えていて、次第にクメールの勢力は衰退する。後発する文化は、先行する文化と同一ではないにしても、先行する文化を受け継ぐことが普通である。そこで、スコタイ、アユタヤにも訪れ、この地でクメールの建築文化をどのように受け継いだのか、変化したのか、変化していないのかを探る作業が必要だった。

時間をかけてタイでの遺跡を見学する機会は1991年が最初で、当時シラパコーン大学に留学していた故成田剛さんに多くのアドバイスを貰った。遺跡を訪れると簡単な平面図を作成していた（図3-1）。スケッチもそうだが、平面を書いて採寸して体で覚えていくのが私の研究の基礎あるいは出発点だからである。この簡単な平面図を成田さんに見せると、タイでは遺跡のこのような平面図はないか、限られた遺跡のみ平面図があるので、上野さんの図面は貴重だ、と言われた。日本では、文化財に指定されている物件は平面図や立面図、修理歴などがあるのは普通で、こうした図面・資料は建物の研究には不可欠の基礎資料である。



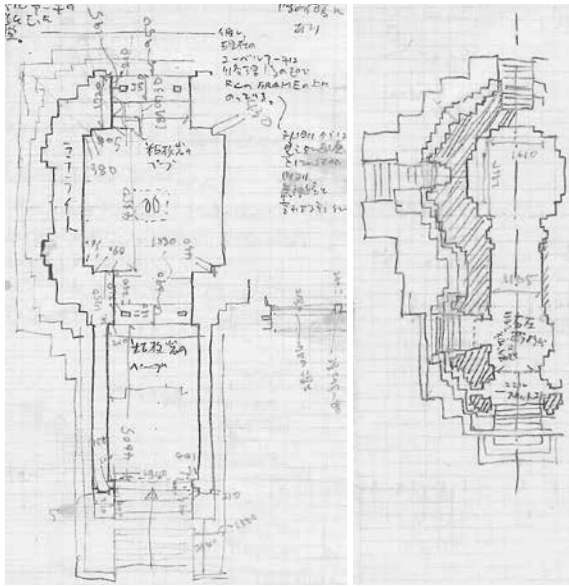


図 3-1 遺跡平面スケッチの例：筆者作図



図 3-2 スコータイ歴史公園周辺図：google earth

平面図を作成してきたのはフィールド用の小型ノートに書くことが多い。この小型ノートは常に持って歩いている必携品である。初めから平面図を採取するのが旅行の目的にある場合はA4版方眼紙を携帯していく。

スコータイ歴史公園の北で、城壁の外にワット・プラ・パイ・ルアン寺院がある。この寺院の中軸線は南のスコータイ遺跡群の東西軸線と異なり、東で大きく南へ振れている。また寺院中心部の東にバライの痕跡がある（図 3-2）。この寺院はスコータイ王朝時代以前のクメールの寺院で、スコータイ建設時に、一部を壊して都市を建設したことが分かる。

タイに所在するクメール遺跡群を見て、カンボジア、ラオス、タイに所在する多くクメール遺跡を見学したことになる。そして気づいたことのひとつが、伽藍配置に定型がない、あるいは定型の考えが希薄であるということである。山岳型、ピラミッド型などというカテゴリー分けがあるが<sup>18)</sup>、伽藍の立地条件によった分類で、建物群の配置によった分類ではない。建物群の配置には定型がなく、主祠堂、副祠堂、小塔、

ゴープラ、付属建物などを、建設主体の王の考え方によって配置している、と考えた方がよい。

アユタヤの遺跡では、木造架構の痕跡を多く見た。そして、当時の木造架構が現存していないことも分かった。いくつかの、現存する木造寺院は、アユタヤ時代当時の木造架構の様相を受け継いでいるだろうから、現存木造寺院も機会を得て、見学して回った。

さて、タイでの遺跡を見ているうちにドゥバラバーテイという古代国家がタイ中央部にあり、その遺跡が散在していることを知った。タイでクメールが勢力を広げる以前の時期に活躍した国家で、中国へも朝貢を行っている。ドゥバラバーテイの遺跡を見ると、レンガ造の遺構で、ベトナムのチャンパのレンガ造やプレアンコール期のレンガ造と比べると、構造材は同じでも、造形・デザインが違うことが分かる。とすると、ドゥバラバーテイの造形の源は南インドやスリランカにあるのだろうか、と考えるに至っている。

ドゥバラバーテイ時代の都市遺跡も興味深いだが、丁寧な考察を行っていない。興味深い理由は、ドゥバラバーテイの都市は、アンコール王朝時代の都市の形状と比較して不整形で共通性が見出せないからである。形状が違うということは、都市の考え方の違いの反映だろうし、それはさら

に権力の考え方の違いなどとも関連してくるはずである。距離は近いのに、何故そのような違いが生まれるのか、考える範囲は広がっていく。

さらに近年、ハリブンチャイという国家もあることを知ったが、ハリブンチャイの遺跡を観察する機会は得ていない。あるいは過去に訪問した遺跡の中にハリブンチャイに関係する遺跡があったかもしれないが、そのように自覚して観察していない。

#### 4 ミャンマー、バガンのマスタープラン作成

一時期前の報告、論文などにパガン (Pagan) と記述していたが、ミャンマー政府が国号表記をビルマからミャンマーに改めた1991年に、パガンもバガン (Bagan) と記述することに決めたので、本稿でもバガンと記述する。念のために、ミャンマーは現国号でかつては日本語ではビルマと呼び、旧首都ヤンゴンはラングーンと呼んでいた。

1994年から1995年にかけて、バガンのマスタープラン作成に携わった<sup>19)</sup>。東京大学の西村幸夫さんを責任者として、彼の研究室にいた助手の鈴木伸治さんや院生の清水琢さんなどがチームを組んだ。マスタープランでは、遺跡の保存も大きい事柄であったので、ラオス、カンボジアで遺跡調査を経験している知見を活かすことを期待されて、私がマスタープラン作成チームに加わったのである。

バガン遺跡を訪れて、おびただしい数の遺構が密集していて、その膨大な量にまず驚いた。この膨大な量の遺跡のインベントリー<sup>20)</sup>を作成した、フランス人ピエール・ピシャルさんの見識に感服した。ピシャルさんもマスタープラン作成のチームの一員であった。

マスタープランでは遺跡ゾーン、考古ゾーン、住民居住ゾーンなどを設定し、その線引きの確認、インベントリーに登載されている遺跡の現況・修復の計画などを決めていった。この時のマスタープランは、ユネスコ、ミャンマー政府などへ提出したが、その後の推移を見ると、このマスタープランは事実上無視される事態が進行した。

マスタープラン策定中に木造建築は気になった。当時のミャンマーでは、バガン時代の遺跡には高い評価を与えているのに、バガン王朝以降の遺跡や、まして木造建築の評価は低く、文化遺産としての認識が希薄であった。バガン地域にも、前近代に建造されたと考えられる寺院は複数あったので、その保護策をマスタープランに入れるよう意見を述べた。実質的な効果ある内容になったかどうか、記憶がないが、その後も機会あるごとに木造寺院の保護は提唱している。

私が木造寺院の保護を主張していると、マンダレーにあるシュエナンドー寺院を見ておくことをアドバイスされた。マンダレーはバガンの北東130kmにあり、バガン王朝の後コンバウン王朝の首都であった。このマンダレーに所在するシュエナンドー寺院は規模が大きく、1880年に建造された建物である。細部の彫刻は丁寧で見応えがある (図4-1)<sup>21)</sup>。バガンの南40kmほどのサーレにある寺院も、重要な木造寺院であろう (図4-2)。ミャンマー各地の木造寺院を網羅的には見ていないが、シュエナンドーやサーレ以外にも、木造寺院は現存しているだろう。こうした木造建築の調査・保存を何度か提起したが、当時は木造建築の保存あまり受け入れて貰えなかった。

1975年にバガンにマグニチュード6.5ないし7の大きい地震があり、多くの遺跡が被害を受けた、と聞かされた。被害の写真と修復後の写真を見せて貰った。地震前の写真と被害を受け修復後の



図4-1 シュエナンドー寺院：筆者撮影



図4-2 サールの木造寺院：筆者撮影



図4-3 宮殿の柱穴：筆者撮影

写真を比べると、修復後は多くの寺院がより完成した形状になっていることに気づいた。

ミャンマーの人々は信仰心が篤い。功德のために寄進するのは日常行為である。この寄進による遺跡への造り足しとでもいうべき行為や、修復に似た改変はこんにちでも続いている。この問題を、どう考えるか、悩ましい。理由は後述する。

バガン地域で宮殿跡といわれる地域での発掘調査の遺構を数カ所見た。遺構の内、円形で穴の壁内側を石組で積んであり、一見井戸かと思われる遺構群があった(図4-3)。規則的に並ぶので、建物跡だろうと考えて、意見を聞いたが、明確な返事はなかった。あまり見たことがない遺構であり、手元に遺構図もないので、ペンディングしておいた。後述するが、後にハノイのタンロン皇城遺跡での礎石の地業穴を見て、バガンでの井戸状に見える穴は、一時は掘立柱穴かと思ったこともあったが、掘立柱穴と考えるよりも礎石地業穴と考え方が良いと判断している。とすると礎石建物が何時期かにわたって造営されていたことになる。この礎石地業は、他に例がなく、バガン独自の工法といえよう。

2014年になって、ミャンマーで初めてピュウの遺跡群が世界遺産に登録された。次はバガン遺跡群を世界遺産にするべく準備を進めている。バガン遺跡群の世界遺産の登録を目指すとする、該当する文化遺産の保護は国際的なルールに則って行う必要がある。バガンは、近い内に世界遺産に登録される遺跡だろう。その際、遺跡の保護と信仰心による変更のルールをキチンと決め、国際的にも納得できるものにしておかねばならないだろう。こう書いていても、言葉では易しいが、寄進者にも国際的にも納得できる案は難しい。

前述のように、寄進行為があると、その資金で何らかの修理工事を行う。その際、個々の遺跡の研究に裏打ちされた修理を行っているとは、現時点では言えないと思う。人々の寄進行為を止めることはできないから、寄進行為に寄る修復活動のルールを確立しておく必要がある。文化遺産の保護の考え方や寄進のあり方を国際ルールに整合するように、寄進者への教育も必要である。

2016年に再度、大地震がバガンを襲い遺跡に被害が出ている。修復が始まるが、個々のレンガ



遺構の調査や、調査に基づく修復を行う必要がある。

初めてヤンゴンを訪れた際、ヤンゴン市内に林立する植民地時代の建物に圧倒された。

プノンペン、サイゴン（現ホーチミン）などにも、植民地時代の建物が多数あり、驚いたが、ヤンゴンの質量はそれらの都市を凌駕している。日本では、江戸時代末期から明治にかけて、洋風建築や和洋が混在するデザインの建物があり、それらの歴史的な位置づけも研究が進んでいる。その時代の日本の近代建築を知る上でも、東南アジア各国に所在する植民地時代の近代建築の研究は欠かせない。そう思っていたので、ヤンゴンの植民地時代の建物群の多さに驚いたのである。

さて、ミャンマーでは2006年にネピドーに首都がヤンゴンから移り、多くの官庁が新首都に移った。ヤンゴンの歴史的建物を官庁の建物として使っていたので、その多くが未使用建築となった。放置しておく、取り壊しの可能性があり、歴史的建築物の保護・活用を唱える市民運動が展開している。

## 5 ハノイのタンロン皇城遺跡の発掘調査

2004年から10年間ほど、ハノイのタンロン皇城遺跡の発掘調査に関わった<sup>22)</sup>。この興りは、2004年にタンロン皇城遺跡の視察をベトナム側から要請されたことである。この遺跡の発掘調査の情報は、伝わって来ていて、掘立柱の建物跡があり安南都護府の建物ではないか、といったニュースが流れてきていた。遺構は複雑で、発掘調査の支援を求めているらしい、ということも伝わって来ていた。どの程度かわるのか不明だったこともあり、考古学調査の支援をすることは考えていなかった。

私は日本、ラオス、カンボジアでの発掘調査の経験があり、その経験を生かして発言することを期待されてか参加を要請された。この視察団には、私の他に井上和人（奈良文化財研究所。所属は当時。以下同じ）、今泉隆雄（東北大学）、重枝豊（日本大学）、山中章（三重大学）、折尾学（福岡市教育委員会）の6人で構成された。この時、日本人視察団の中でたまたま私が年長者であったことから、団長を務めた。

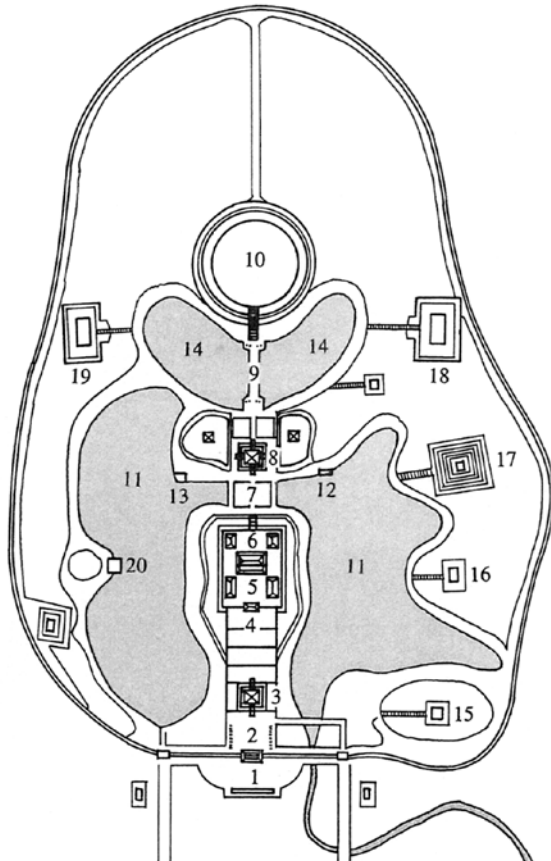
関わった当初は、この遺跡は地名を冠して“バーデイン遺跡”とか“ホアンデユウ18番遺跡”とか呼ばれたが、2010年の世界遺産に登録した際、タンロン皇城遺跡と呼ぶことになった。さて、2004年にタンロン皇城遺跡を訪れた際、遺跡の評価について意見を求められた。「宮殿遺跡として、規模が広く、建物は残っていないが、建物跡は良く残っていて、きわめて貴重である」と表明した。こうした意見を表明することで、視察団の責務は終了し、この遺跡との関わり合いは終了すると思っていた。しかし、この視察の後、宮殿跡の発掘調査の経験が乏しいので、調査を共同で進めたいと申し出があり、断る理由もなく、調査を共に行うこととなった。

2004年以降のタンロン皇城遺跡の視察団に参加し、その後発掘調査を共同で進めることに先立って、ベトナムでは1997年にフエで、明命帝陵の右従寺という木造建築の修理<sup>23)</sup>に、2000年にはベトナム中部にあるチャキュウ遺跡の発掘調査<sup>24)</sup>に関わったことがあった。

明命帝陵に右従寺という建物があり、主殿に対してその前にあるオープンスペースの左右に位置する脇殿にあたる（図5-1）。右従寺の“寺”は、おそらくベトナム語の直訳だろう。寺というと、複数の建物で構成される寺院をイメージするが、右従寺は、こういう名の1棟の建物である。右従寺の建物の解体修理に立ち会うことで、伝統的な構造を丁寧に観察することができ、こ



図5-1-1 明命帝陵・右従寺：筆者撮影



明命帝陵（聖祖仁皇帝孝陵）

- |       |         |        |
|-------|---------|--------|
| 1：大紅門 | 8：明樓    | 15：追思齋 |
| 2：拜庭  | 9：聰明正直橋 | 16：觀瀾所 |
| 3：碑亭  | 10：皇帝墓  | 17：靈芳閣 |
| 4：顯德門 | 11：澄明湖  | 18：左従房 |
| 5：崇恩殿 | 12：迎涼館  | 19：右従房 |
| 6：弘澤門 | 13：釣魚亭  | 20：虚懐樹 |
| 7：偃月橋 | 14：新月池  |        |

図5-1-2 明命帝陵全体配置図：『SD 9603』  
（数字5の西の建物が右従寺）

の時に、ケオというベトナム独自の軒を支える構造を知ることになった。この修理では、当初材を大事にして往時の右従寺の歴史的価値を受け継ぐ、という日本で進行している文化財建造物の修理技法を伝えるようにしていた。この修理工事を通じて、考え方や修理技術は伝わったかと思っていた。しかし、2014年、二回目に明命帝陵を訪れた際、左従寺の修理を目にしたとき、右従寺の修理で示した日本の修理方法は根拠がないことが分かった。というのは、右従寺の対になっている左従寺はベトナムのやり方で修理が行われているとみられ、一見すると新築のようになっていたからである。

グエン王朝では、皇帝が逝去する前から自らの廟墓を造っていた。フエ市街地の近郊に歴代の皇帝の廟墓があり、世界遺産に登録されている。廟墓は、いわゆる墓所とその周辺に離宮を構えるのが普通である。皇帝が逝去すると、新帝とその家族が宮殿に入り、先帝の家族は、すでに造営してある廟墓・離宮に居住するのである。このこと知って、では日本ではどうなのかが気になった。古代史の専門家に聞くと、日本では先帝の家族が、新帝即位後にどこに居住するのか分かっていないということだったので、こういう事柄も日本との比較研究課題として存在していることを知った。

チャキュウでは、狭いトレンチだが興味ある成果を上げている。チャキュウで見つけた柱状の遺構は、この時には正しく理解できなかった。後に、タンロン皇城遺跡で、礎石の地業を見て初めて、チャキュウの柱状遺構は礎石の地業だと、遡って理解できたのである。

チャキュウで発見した柱状の堆積は、上に礎石を据えるための基礎地業であることが、明らかになった。漢代にあたる時代にベトナムで礎石を据えた木造建築が所在したことは確実である。

タンロン皇城遺跡の調査の話に戻ろう。

タンロン皇城遺跡に関わった2004年当時、私はベトナムの歴史をキチンと学んだことはなく、李朝も陳朝も知らなかった。まずベトナムの歴代王朝にどのような王朝があり、いつからいつまでが何王朝かを覚えることから始まった。ラオスで、ワット・プーの発掘調査を始めたときも、クメールもヒンドゥー教の神々さえも知らずに始まったことを思い出していた。

タンロン皇城遺跡では考古学の専門家が調査をしているので、遺構の分析・考察は手慣れたものである、と思っていた。しかし、この判断は間違っていた。タンロン皇城遺跡での発掘調査協力を依頼されて、共同調査が始まり、2015年ごろまで年数回ハノイを訪れることになった。遺構が錯綜していて、遺構をそのまま図にしたものを一見しただけでは、様相が理解できない。まず、正確な遺構図の作成、時期分けの考え方、遺構の時期別色分け図の作成、と教えて行った。時期ごとに色分けして、変遷を明らかにするのは日本では通常の手法であり、世界中の考古学者に共通する分析手法だと思っていた。しかし、遺構の解釈の意見交換をする内、分析の手順を正しく理解していない、あるいは手続きを丁寧に行っていないことが分かったので、手順から教えることになったのである。錯綜する遺構のうち、どの柱穴とどの柱穴が組み合うのか、どの建物が新しいのか古いのか、それらを一つ一つ検討し整理していった。この過程では、ベトナムで発掘調査を行い、都城などの考古学研究論文を発表していた故西村昌成さんが通訳を務めてくれた。毎日、調査終了後、短時間でも意見交換のミーティングを行った。こういう情報交換、意見交換を現場で行うことも初めてだったと、後で聞いた。

発掘調査地は広くA区・B区などと区画されていて、E区まで設定されていた。そのうちのD区での共同調査の際には、日々の意見交換が必要であることを力説した。若い考古学者と連日議論を行った。この時の若い考古学者が今は、中堅研究者として調査を牽引している。このD区でも、带状遺構があり、後述するように道路遺構か壁基礎遺構かが問題となった。

遺構を整理する作業を行って、A区・B区の概要を把握でき、さらにC区-E区を含めて発掘調査を実施した全域で李朝の様相を明らかにできた(図5-2)。タンロン皇城遺跡で、顕著に残っていて整理できたのは李朝の遺構である。李朝以降に李朝時代の建物群を継承したり取り壊して陳朝・黎朝の建物を造営していて、遺構は重複する。にもかかわらず一番古く下層にあるはずの李朝時代の遺構が顕著であるのは、一つは李朝時代の工法が丁寧で、残りが良い。もう一つは、発掘調査の技量に関係するが、上層遺構と下層遺構の見極めが難しく、上層遺構である陳朝・黎朝の建物群を認識できず下層の李朝時代の明らかな建物群を検出している、という事情があろう。歴史時代の建物跡の発掘調査の経験が乏しいことに加えて、発

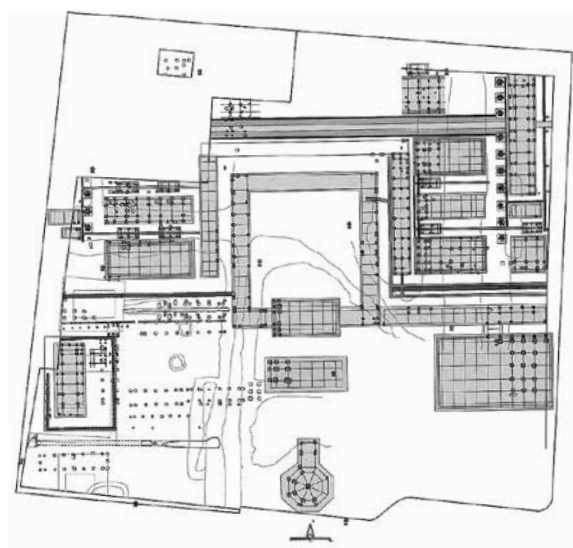


図5-2 タンロン皇城遺跡李朝遺構配置図：  
『Thang Long-Ha Noi』(Vietnam Academy of  
Social Science, 2010)



掘調査地は国会議事堂建設予定地で、建設の事前調査であり、調査期間に余裕がなく天候が悪い日でも調査を進めざるをえなかったのであろう。発掘調査中の写真をみると水たまりがあるような状況で調査を行っていて遺構検出は困難だったと推察される。石列、レンガ列などの遺構、石の集合など明らかに目にできる遺構を検出したとも想定されるのである。

共同調査の過程でA区・B区で発見した遺構のうち、帯状遺構は「道路遺構か壁遺構か」が大問題となった。ベトナム考古学者が端門の北で1999年に検出した遺構を、それ以前に発掘調査した道路遺構の知見をもとに、道路であると考えていた<sup>25)</sup>。端門北で検出した遺構との比較検討から、A区・B区で発見した帯状の複数の遺構を道路遺構としていた。この帯状の遺構について、私はベトナム側の見解に異論を唱え、道路ではなく壁の基礎遺構であると提起したのである。提起した当初は、ベトナム側研究者は1人も賛同してくれなかった。後に多くの研究者の賛同を得ることになるのだが、当初は一緒に日本から参加していた井上和人さんだけが賛同してくれた。

多くのベトナム研究者が当初私の見解に賛成してくれなかったのは、遺構の解釈だけにとどまらない問題を含んでいたからからである。すなわち、タンロン皇城遺跡の中軸線の位置をどこに設定するか、という大きい問題と絡んでいたからである。宮殿や寺院のように建物が群をなすとき、そこでの建物の配置はある秩序をもって構成される。その構成の基準となるのが建物群の中軸線である。

私がタンロン皇城遺跡の発掘調査に関わり、中軸線の位置が李朝以来不変であることに疑問を指摘するまで、ベトナム研究者は「タンロン皇城遺跡の中軸線は、旗台、端門、敬天殿基壇の中心、北門を結ぶ線で李朝以来変わっていない。」という見解だった。端門北での道路と考えている遺構が壁だとすると、この中軸線不変の考え方が成り立たなくなるので、私の意見は、直ちには賛成して貰えなかったのであった。2008年11月のシンポジウムに至ってやっと、多くの考古学者の賛同を得ることになった<sup>26)</sup>。でも2018年夏に至っても、公式には李朝時代の中軸線は陳朝・黎朝と受け継がれているとする。しかし、事実は明らかなので、近い将来、宮域の中軸線は李朝時代から一貫している、という説は是正される、と思う。



図5-3 タンロン皇城遺跡 掘立柱：『Thang Long-Ha Noi』 Vietnam Academy of Social Science, 2010)

タンロン皇城遺跡では、李朝時代の建物に掘立柱を使用している(図5-3)<sup>27)</sup>。11世紀初めの建物に掘立柱を用いるのは時代にそぐわない。ベトナム考古学者は、この地区の掘立柱を最初、大羅時代、李朝以前と考えていた。そう考えるのも当然で、宮殿で掘立柱を用いるのは、日本だと8世紀の平城宮までで、一部に残っていくものの、大勢は礎石建物に変わっていく。掘立柱は、いわばプリミティブな工法だから、大羅時代と考えたのである。しかし、層序を見ると、明らかに李朝の層から掘り込んで柱穴を掘り、掘立柱を立てている。11世紀にもなって掘立柱を用いる理由は分からない。

さて、掘立柱は、日本では前近代では広範囲に使われた工法で、一般的にも理解される工法である。

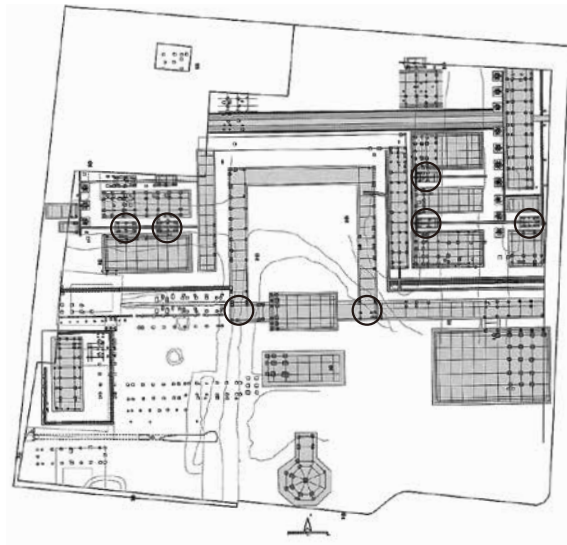


図5-4-1 双子柱建物位置図：『Thang Long-Ha Noi』  
(Vietnam Academy of Social Science, 2010) 所載の図に加筆

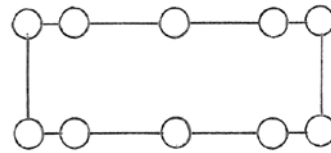


図5-4-3  
双子柱建物模式図：筆者作図



図5-4-2 タンロン皇城遺跡の双子柱を示す礎石：  
筆者撮影

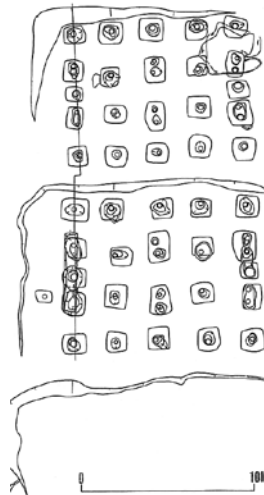


図5-5  
遺構例・鳴滝遺跡：  
『群衙正倉の成立と変遷』（奈良  
国立文化財研究所、2000）

ところが、ベトナムでは一般的ではなく、日本語の掘立柱に対応する、適切な用語がベトナム語にはなかったと、後に通訳をしていた数人から聞いた。そこで、ベトナム語で陽柱、陰柱という新しい用語を生み出した、というのである。陽柱は礎石上に立つ柱、陰柱は日本語で言う掘立柱である。

A区・B区に“双子柱”と私が名付けた柱を持つ遺構があり（図5-4）、D区・E区にも双子柱があった。双子柱は二本の柱を近接して並べて建てて構造体を組み上げるものである。双子柱の事例はタンロン皇城遺跡だけではない。ハノイ南方130kmほどにあり、世界遺産に登録されたティン・ニャー・ホー遺跡の南門に、またインドネシアのプラタナンの中心区にも双子柱の遺構がある。しかしいずれのケースも双子柱を立てる理由は明らかではない。日本にも和歌山市：鳴滝遺跡の倉庫遺構に双子柱を用いた事例がある（図5-5）。日本の事例は構造上で、より強固にしようとしたのではないかと考えられる程度にしか理由が分からない。

ベトナム北部では中国建築を受容していると考えられるが、現存する建物を見るかぎり建物の

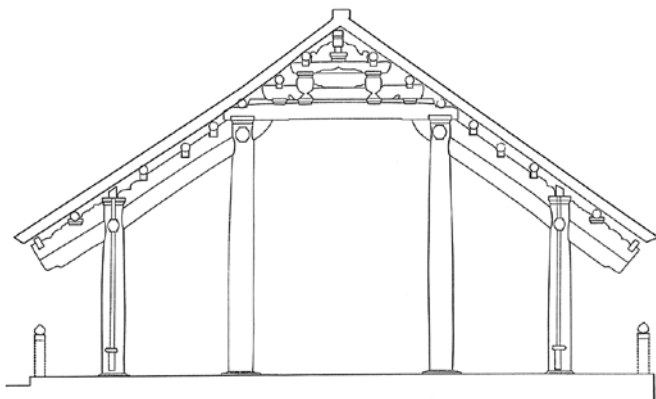


図5-6  
ベトナムで現存する伝統的構法、ケオの事例：大山亜紀子『北部ベトナム仏教寺院の伽藍の変遷過程に関する研究』（学位論文、2004）

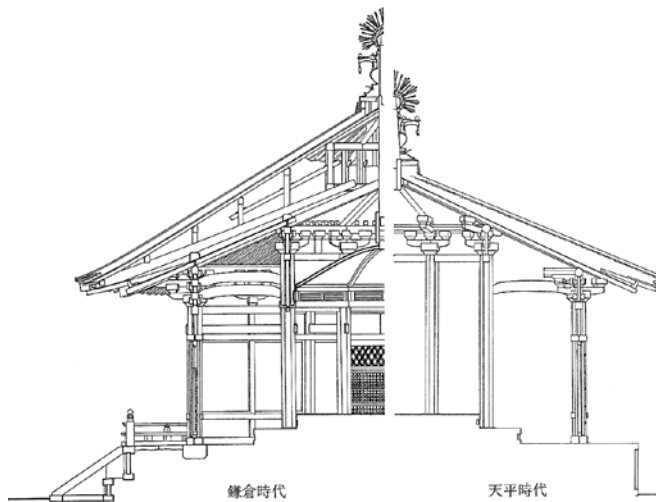


図5-7  
野小屋の事例・法隆寺夢殿（左が野小屋を付加したもの、右が当初）：鈴木嘉吉、渡辺義雄『法隆寺 東院伽藍と西院諸堂』（岩波書店、1974）

外観は似た部分があるものの、構造的にはまったく違うといつてよいほど中国建築の系統はない。中国・朝鮮・日本などの東アジアで見られる組物を用いておらず、ベトナム独自の建築の発展を考慮しないと、異同の意味を解明できないだろう。ベトナムに現存する建物は組物を用いず、柱頂部にケオを称する斜め材を用いて軒を支える（図5-6）。ケオに相当する部材は東アジアでは見られず、ベトナム独自の構法である。同じ木造でも、それぞれの国独自の展開をするのは自然である。日本では<sup>はねぎ</sup>桔木を用いた野小屋構造が発達する（図5-7）が、桔木の構造は中国や朝鮮には見られないし、ベトナムにもない。

次に、古代日本だと、寺院・宮殿では主要建物は基壇全体を版築で固めて、その上に建物を建設する。ベトナムでは基壇全体ではなく、それぞれ礎石の下に一つ一つ基礎地業を行うので、この点もベトナム独自の工法であろう。前述のように、ミャンマー・バガンの宮殿跡でも一つ一つの柱について基礎地業を行っている。両者の間に関係があるのかないのかは不明である。

ベトナム建築には、中国建築の要素が希薄なのに対して、都城の構成は中国の都城を忠実に習っている。フエには、南郊壇跡、社稷壇跡が残り（図5-8）、祭祀を行っていたことが分かり、中国の都市の考え方を受け入れている。タンロン皇城遺跡でも、南郊壇、社稷壇の位置は確認できている。一方、日本の古代都城では、南郊壇、社稷壇は確認されていない。このように、都市の様相の受容と建築の受容にベトナムと日本では相違があり、この差異については「日本の古代都市における儀式空間についての予察的考察 — 漢字文化圏に南郊壇、社稷壇、太廟の事例う研



究一」という小論を書いて私見をまとめた<sup>28)</sup>。

現ハノイには中国唐代に安南都護府があったことが知られている。ここの長官を阿倍仲麻呂が務めたことを知った<sup>29)</sup>。タンロン皇城遺跡には、李朝以前と考えられる遺構群があり、その遺構群が安南都護府の可能性はある、ことは疑いない。ただし、現時点ではこれらの下層遺構が安南都護府の遺構であるという確定できる証左はない。しかし、タンロン皇城遺跡の近くか、あるいは重複して安南都護府の遺構があるのは間違いないだろう。1300年前に、この地に日本人が活躍していたのを知り、しかも良く知られている阿倍仲麻呂であったので、驚いた。奈良に居住していて、「天の原、ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも」の歌は知っていたし、その作者が阿倍仲麻呂であることは、よく知られている。

ベトナムに関わって林邑<sup>りんゆう</sup>の僧、仏哲(仏徹とも)を知った。林邑とは、現在のベトナム南部にあった古代国家の名である。奈良時代、東大寺創建の際、天平勝宝四年(752)大仏開眼供養の時「林邑舞」が奉納されている。この林邑舞を伝えたのが僧仏哲である<sup>30)</sup>。この林邑舞は、日本ではこんにちまで伝えられているが、ベトナムでは途絶えている。

専門外だが、無形文化遺産の保護は、文化遺産の保護全体にかかわることが多いし、建物や遺跡の保護にもかかわると、常々感じている。建物内で行われた行事・儀式の様子が分かれば、建物の様相を理解できるからである。

さて、2010年、ベトナム政府が目指していた年にタンロン皇城遺跡は世界遺産に登録された。そのこと自体は喜ばしいことだが、価値、意義を明らかにしていく仕事は継続している。ところが、「世界遺産に登録されたのに、まだ発掘・研究が続くのか」という声があるという。日本にも同じようなことがあるから、研究活動の継続には支援していきたい。

タンロン皇城遺跡の世界遺産登録に続いて、ハノイの南にあるティン・ニャー・ホー遺跡が2011年に世界遺産になった。ティン・ニャー・ホーは15世紀初めの胡王朝<sup>ホー</sup>の都であって10年間ほどという短い期間の都市である。宮域を囲う壁、四辺中央に開く門基壇や南郊壇跡が残る。

タンロン皇城遺跡の解明に協力して、いくつかの課題も明かになっている。この遺跡ではチャム文字が刻まれたレンガが出土している。チャム族は、ベトナム中部・南部にミソンほか多くの

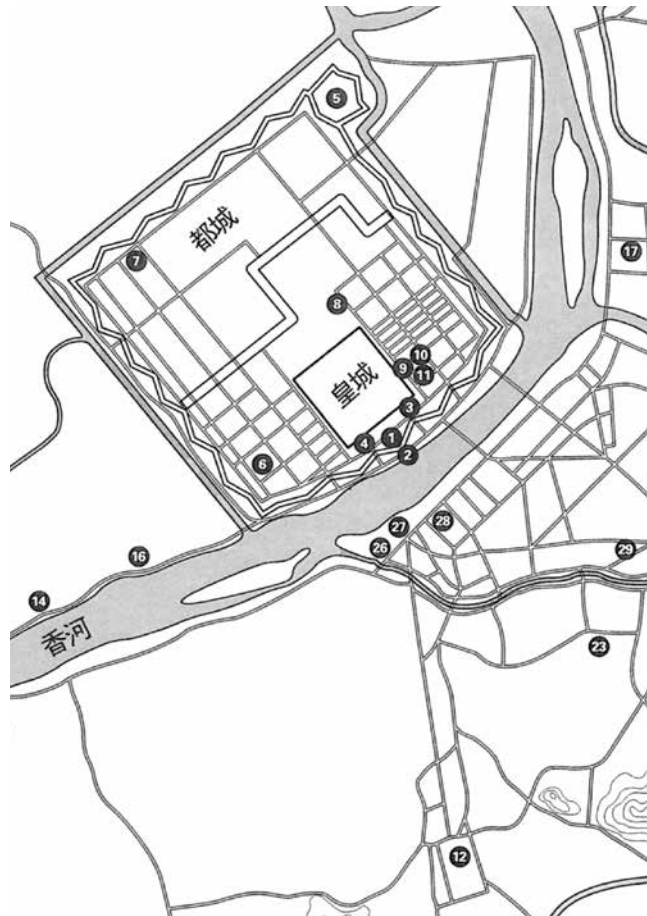


図5-8 フェ全体図：「SD 9603」  
(図中 6が社稷壇、12が南郊壇)

レンガ遺跡を残している。宗教遺跡の他にも都市遺跡を残していて、こうしたチャム族の都市遺跡とタンロン皇城遺跡やベトナム北部の都市遺跡が関係があるのかないか、関係があるならどのように似ているのか、関係がなさそうだとしたらそれは何故なのか、などの問題が横たわっている。チャンパの都市ばかりでなく、ハノイ周辺にある、コーロア、ルイラウ、南のホアルーなどの都市遺跡での発掘調査の成果との比較研究も課題である。

タンロン皇城遺跡では、当時の建物は残っておらず、建物跡が見ることができる。こうした状況では、往時の宮殿の様子をイメージすることが一般の方々には難しいので、建物を復原したら、という話が持ち上がっている。とくに政治家からは、強く求められているらしい。しかし、難題である。ベトナムには、李朝に遡る建物は現存せず、同時代の宮殿建物をイメージする手掛りが乏しいからである。すこしでも手掛りがあるのではと期待されるのが建築の土製品である。タンロン皇城遺跡内から、建築の小型土製品が出土している（図5-9）。建物の一部で全体の形状は分からないが、手掛りにはなる。さらに、陳朝時代の建築模型とでも言うべき小型建築土製品が、ハノイの歴史博物館やいくつかの省博物館にある<sup>31)</sup>。

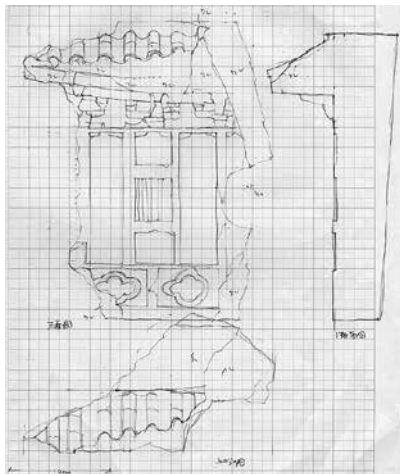


図5-9-1  
タンロン皇城遺跡出土小型土製品：  
筆者作図

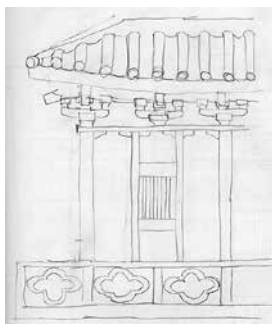


図5-9-2  
上図から想定される建物：筆者作図

これらの建築型土製品には組物を表現しているものが多い。これらの土製品は当時の実際の建築の様相を反映しているだろうから、私は陳朝時代の寺院・宮殿建築には組物を用いていたと想定している。一方、黎朝以降の建築は組物を用いず、ケオで軒先を支持する。私は技術の断絶があったのではないかと考えている。陳朝のあとホー王朝は南のタイン・ニャーに都を構え、タンロン城から再利用できる建築部材を運んでいて新宮殿を造っている。明はベトナム支配の拠点タンロン城に置いていたと想定され、陳朝までのタンロン城は荒廃していただろう。このように黎朝がタンロンを再び都にするまで約50年間、宮殿を築く技術は中断があるのではないかと考えている。黎朝はもとのタンロン城の位置に宮殿を再編成したものの、李朝・陳朝の建物群の大半は破壊されていたから、技術を継承することはなく、当時の新技術を用いて造営しているので黎朝のタンロン城は、李朝・陳朝のタンロン城の位置を踏襲はしているが、宮城は新しく造営したといっただろう。

2000年のチャキュウ遺跡の調査期間中に休みを利用してホイアンを訪れた。静かな佇まいの古い町並であった。2015・2016年と再びホイアンを訪問する機会を得たが、この15年間の間の変わりように驚いた。歴史的町並みにおける文化遺産保護と観光地としての展開をどのようにコントロールするかは、どこでも共通する課題となっている。

## 6 インドネシア、マレーシアでの遺跡調査

インドネシア、マレーシアでは長期に滞在して遺跡の調査を行ったことはない。遺跡を丁寧に見て回る旅行を数回行っている。2002年・2008年・2009年・2012年にインドネシアを、1992年・2003年にマレーシアを、古代遺跡・古い町並みを主な訪問先として遺跡・建物を観察する機会を得た。インドネシア、マレーシアでは現在イスラム教が主たる宗教である。一方、残っている文化遺産としての遺跡の多くは、仏教遺跡、ヒンドゥー教遺跡である。

### インドネシア

インドネシアでは、世界遺産になっているボロブドゥール、プナンバナナへ最初に行き、その後ディエン高原を訪問した。さらに2012年バリ島・スンバワ島を訪れ、バリ島ではこの島のヒンドゥー教関係遺跡を、スンバワ島では旧宮殿建物を見学した。見学した遺跡の大半は石造であるが、スマトラ島のムアラジャンビ遺跡はレンガ造の遺構であるし、スンバワ島の旧宮殿建築は木造建築（図6-1）であり、プラオサンは北区を中心建物に失われているが木造であった（図6-2）。プラオサンは残りが良い南の2区画が紹介されることが多いが、3区画ある。南の2区画の主堂は石造のチャンデイだが、北の1区画には礎石が残っていて、この区画の主堂は木造建物であったことが分かる。3区画が連続していて、南の2区画には石造の主堂が核となっているの



図6-1 スンバワ島 旧宮殿建物：筆者作図

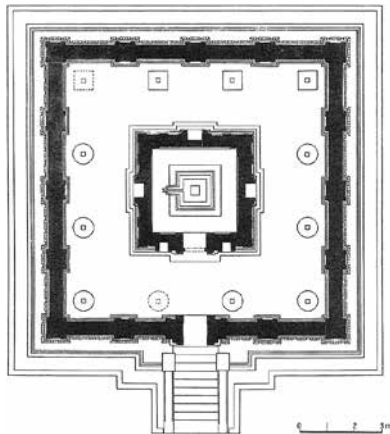


図6-3 サンビサリ平面図：千原大五郎  
『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』

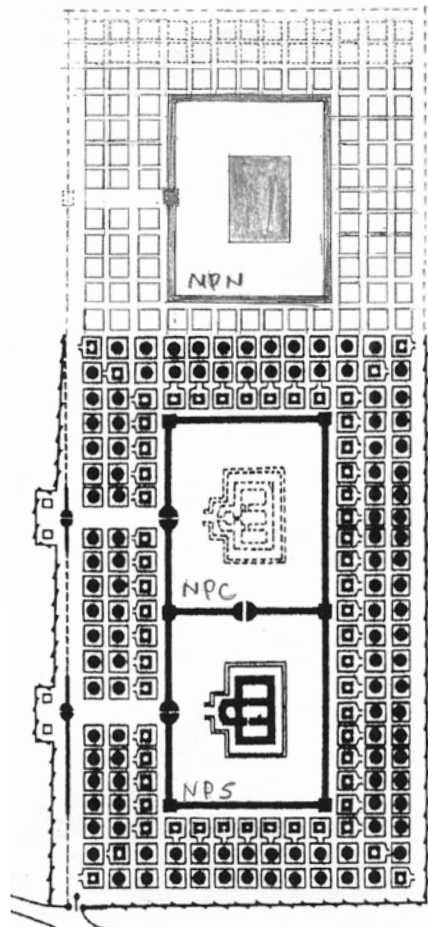


図6-2 プラオサン全体平面図：筆者作図



に、北の1区画の主堂は木造であった。その理由を知らないで、不思議に思っているが、先学の考察を知らないだけであれば、浅学をお許し願いたい。

さらに、サンビサリヤケドゥランの主堂を覆うような木造構築物があったと考えられる(図6-3)。日本風にいえば覆屋おおいや、鞘堂さやどうである。サンビサリヤケドゥランの主堂を覆う木造構築物について、説明しておく。図示したように基壇上で主堂の回りに礎石が、規則性をもって並ぶ。この礎石上には木製柱が立ちあがると判断されるので、何らかの木造構築物を想定せざるを得ない。柱を立てるだけとは考えられないので、主堂を覆うような構築物を想定するのである。日本でも主体部を覆う建物も事例があり、たとえば平泉・中尊寺の金色堂を覆う建物がある。

ジャワ島西部にあるレバツ・チベドゥ遺跡(図6-4)にピラミッド状の段積み遺構がある<sup>32)</sup>。ピラミッド状の遺跡という点だけからいえば、カンボジアのベンメリアの東バライの東南隅にあるプラサート・コン・ブルックやコンポンスヴァイのプリア・カーンの東バライ東南隅にもプラサート・ダムエイがあり、様相がレバツ・チベドゥに似る。コーケルのプラサート・トムにもピラミッド状遺構があるが頂部にあった祠堂の基壇であり、前述の3つの段積み遺構とは様相が異なる。前述の3遺構は似ている点もあるが、異なる遺構なのか、共通する性格なのかを検討することが課題となる。レバツ・チベドゥ遺跡の造営時期は明確にはなっていないが、仏教やヒンドゥー教の要素はみられず、この地に居住する人々の土着の信仰による構築物だろう、と考えられている。

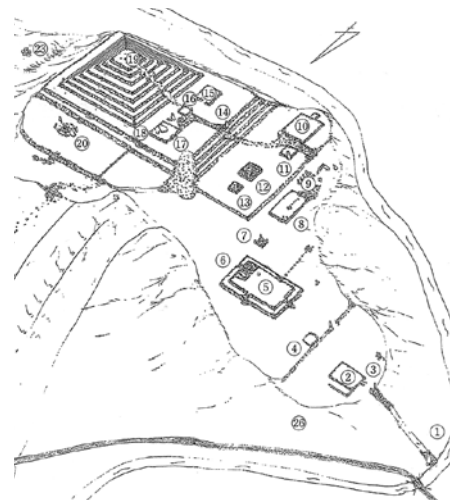


図6-4  
レバツ・チベドゥ遺跡：『東南アジア考古学最前線』(クバプロ、2002)

ジョグジャカルタの王宮には木造建物があるが、詳しく観察する機会を得ていない。

デイエン高原の、チャンデイ・アルジュナは、主堂とそれに向き合う副堂<sup>33)</sup>がある(図6-5)。グドン・ゾングの第二グループや第三グループにもチャンデイ・アルジュナと同じ配置の2棟の建物がある。礼拝者や宗教主体者がどのように動くのか興味深い。一つ一つの建物を研究対象とした論稿は多いが、チャンデイ・アルジュナのように、建物相互の関係を考察した論稿は少ない。建物が群をなしている場合、建物同士の関係や群そのものがどういう意味があるのかも考察する必要がある。チャンデイ・グヌンケネイのように5つの建物が並び、中央が中心・核だと思ってしまうが拙稿「建築・建築群の中心性・求心性の考察 その1」<sup>34)</sup>で指摘したように向かって左端の建物が格上で核である。

インドネシアにシラップという板葺があり、格が高いという<sup>35)</sup>。シラップ葺が上位で、他に草葺がある。時期は明確ではないが、ジャワ島では板葺から棧瓦へ変わるようだが<sup>36)</sup>、古い様相を示す瓦葺建物はないようである。板葺と草葺の建物であれば、板葺が上位であると納得できる。瓦葺建物を見慣れていると、板葺・草葺よりも瓦葺が上位であることが常識になる。板葺であるシラップ葺建物が上位であるという考えに違和感を覚えるのは、瓦葺が上位という感覚が当然であると思っているからであろう。

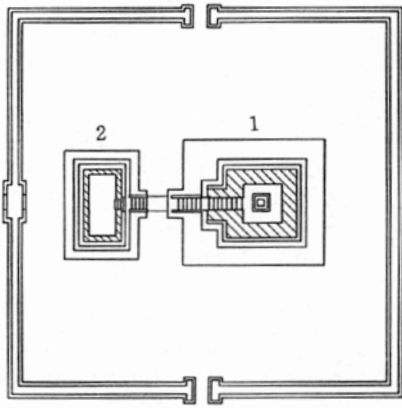


図 6-5  
 チャンデイ・アルジュナ：千原大五郎  
 『インドネシア社寺建築史』

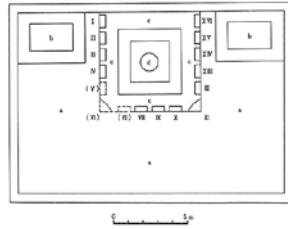


図 6-6  
 チャンデイ・ジョロ・タウン  
 ：千原大五郎『インドネシ  
 ア社寺建築史』

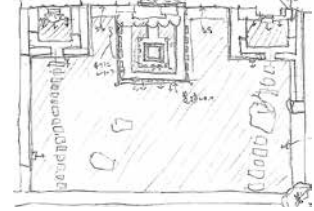


図 6-7  
 チャンデイ・ジョロ・タウン  
 ：筆者作成

建物・遺跡の図面を採取するのは、私の研究の基礎活動であり、インドネシアでも時間が許すかぎり遺跡・建物の図面・スケッチを作成する。その結果、チャンデイ・ジョロ・タウンの浴場は、『インドネシア社寺建築史』<sup>37)</sup>掲載の図（図 6-6）のように左右対称ではなく、非対称であった。主体部はほぼ中央にはあるが、現地でスケッチした平面図（図 6-7）によれば左右対称ではなく主体部が向かって左に寄っている。一見左右対称に見えるが、ラフにせよ平面図スケッチを採取することによって、こういう発見ができるからスケッチは意味がある。ただ、なぜ左右対称としないかは、私には分からない。宗教上の慣習上の作法・ルールがあるのであろうか。

## マレーシア

マレーシア半島の西側中央部にケダー遺跡群がある。この遺跡群はレンガ造の祠堂で、聖水の出る装置が北にあるのでヒンドゥー教の建物であったことが分かる。遺跡の多くは、2世紀～7世紀ごろと推定される。いくつかの遺跡は発掘調査後に原位置から移動し整備されていて、厳密には旧状が分からないのが惜まれる。



図 6-8 ケダー遺跡の一例：筆者撮影

ケダー遺跡の多くは、レンガ造の祠堂の前に礼拝空間としての木造のマダパを配置する。その一例を図示する（図 6-8）。マダパの上部構造は欠失していて、柱位置を示す礎石が残るので、木の柱を立てるので木造であったことが分かる。カンボジアの仏教テラスの個所で記述したように、ケダー遺跡でも主堂前に建つ木造建築は具体的には分からない。分からない理由は、カンボジアの西トップ寺院でのテラスの所で記述した理由と同じで、安定した構造体を想定するには梁間が広すぎるのである。

マレーシアのパナン島に1992年に訪問している。ジョージタウンは、この一帯がイギリス植民地時代であった時期に建設された都市で、往時のゾーニングを含めて歴史の様相を色濃く残していた。1990年代に、開発計画が進み始めたときに、歴史的環境を受け継ごうという市民運動が興り、町並みが残ることになった経緯がある。私が訪れたときには、市民グループの方々の熱い思

いを聞かされた。この島にあるジョージタウンと半島にあるマラッカは2008年に世界遺産に登録された。残念ながら、マラッカには行ったことがない。

## 7 南アジアでの遺跡調査

東南アジアの宗教関係遺跡は、インド、スリランカから考え方やデザインが入ってきていることが先学の研究で明らかになっている<sup>38)</sup>。そこで、この地域の建物・遺跡をみて、南アジア地域の遺構と、東南アジアの遺構の共通性や差異を考えておくことも課題であった。しかし、長期に滞在して遺跡を観察する機会はなく、数回訪れ丁寧に遺跡を観察したにとどまっている。アンコール遺跡を遡る時代の遺跡を見て、それらと東南アジア諸国の遺跡と比較して考察することが主な狙いなので、比較的古い遺跡を見て回ることになる。

### インド

1998年・2010年と二回南インドを訪れた。バーダミ、アイホーレ周辺と、マハーバリプラム、カンチープラム周辺などである。機会があれば北インドの建物の見学も必要だが、まずは東南アジアと関係が深いと想定される南インドの遺構を観察することを優先させた。

カンボジア南部にある“アスラム・マハ・ロセイ”と呼ぶ祠堂(図7-1)は、内法材の上に馬蹄型の龕を穿ち、龕の中に人物像を浮き彫りしている。この点や全体の意匠を比較すると、インド・アイホーレに所在するラドカーン寺院やマハーバリプラムに所在する五つのラタなど、南インドの7・8世紀の寺院と共通するデザインを持つ(図7-2)。

木造建築だと、建物の主体を構成する部材に彫刻を施すこと、レリーフを彫ることはまずないか少ない。禅宗建築の細部では絵様を施すし、安土桃山時代以降の日本の建築でも彫刻が多用される。レンガ造・石造だと、ここかしこに彫刻を施すのが古くからあるし、レリーフも多い。東南アジアの建築が、当初は木造であったが次第にレンガ造・石造に移行していく過程で南インド・スリランカの建築を学んだと思われ、レリーフで建物を飾ることも、その過程で習得したのであろう。アンコール・ワットを初めて訪れたときには、あらゆる面に多種多様なレリーフ・彫刻で埋め尽くした感がある建物に圧倒された。



図7-1  
アスラム・マハ・ロセイ：  
Claude Jacques & Philippe  
Lafond『The Khmer Empire』  
(River Books, 2007)



図7-2  
インド南部の海岸寺院：筆者撮影



## スリランカ

1993年・2010年の二回、スリランカを訪れている。一回目にシーギリア、ポロンナルワ、アヌラーダプラ、キャンデイ、二回目は上記の遺跡に加えて、北部のトリンコマリーなどに訪れた。1993年の際には、北部地域を訪れなかったが、時間が限られていたばかりでなく、北部地域が当時、内戦状態で足を運ぶことができなかったからである。

キャンデイの仏歯寺の木造建築群に驚いた。遺跡の多くが石造で、木造建物が所在することを想定していなかったからである。仏歯寺の築造年代は知らなかったが、前近代の建築と考え、伝統的な工法だろうと判断した。東南アジアの木造建築を考える際に参考になるのかな、と思った。

コロンボから北東25kmにあるダンバ・デニヤに木造仏堂があり、構造体が残っている木造建築として貴重である(図7-3)。造営時代は不詳だが、前近代の技法を採用していると理解できる。

ポロンナルワに所在するダラダーマル寺院やマンダラギリ寺院のワタダーゲーなどに円形遺構があり(図7-4)、円形遺構の中央部を覆う木造構築物があったと考えられる。インドネシアで見られる覆屋・鞘堂との関係の有無が気になる。いずれにしても、現存しないが、木造建築があったことは確実である。

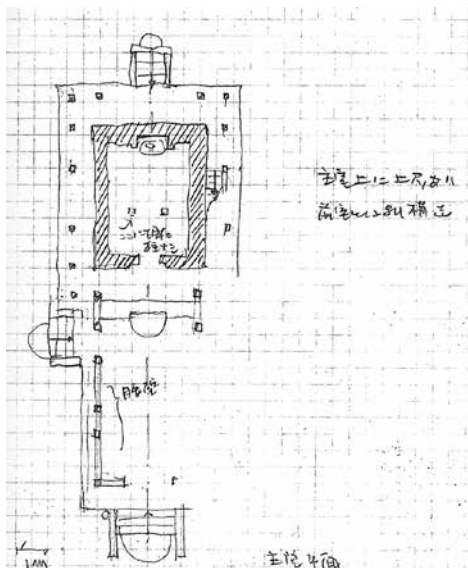


図7-3 ダンバ・デニア木造寺院：筆者作成

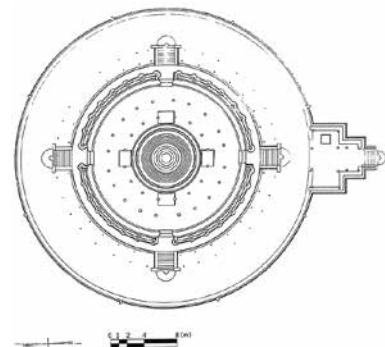
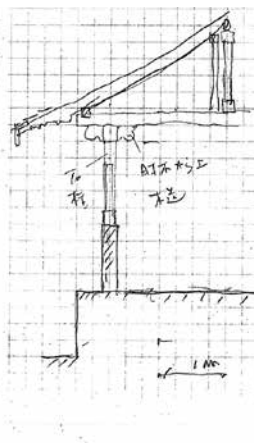


図7-4

ダラダーマルワ寺院ワタダーゲー遺跡平面図：『スリランカの古代建築』(早稲田大学アジア建築研究会、1991)

## 8 フィリピンでの相手国調査

文化遺産国際協力コンソーシアム(JCIC-heritage)は2013年2月に、文化遺産保護の国際協力の実情・日本への期待などについてフィリピンを対象国として相手国調査を実施した<sup>39)</sup>。この時の調査団の一員としてこの国を訪れた。世界遺産に登録されているバロックの教会群(1993年登録)やビガン(1999年登録)ほかを訪問した。バロックの教会群のうちには第二次世界大戦時に大きな損害を受けた教会があるが、復興している。また、2013年10月にセブ島、ボホール島をマグニチュード7.2の地震が襲い多くの教会が倒壊したことを受け、その復興をテーマにしたセブ島での国際会議に2014年に出席する機会があり、2013年2月に訪問できなかったパナイ島の世界

遺産登録の教会を訪問した（図8-1）。

ビガンはルソン島の北部、西海岸に位置する。この都市は、第二次大戦中に大きな損害を受けず、植民地時代の都市の様相を色濃く残っていて、1999年に世界遺産に登録された。第二次大戦中に大きな被害を受けなかったのは、日本軍が占領から撤退したという事情があると聞いた。ビガンで第二次大戦の様相の一部を聞いた訳だが、東南アジア各国を回っていて、ミャンマーでも日本兵の悲惨な撤退の様相を聞いたし、ラオスでは報道されていないベトナム戦争の実態を知る機会があった。文化遺産を保護し受け継ぐためにも、平和な社会、安定した社会が必要であると身にしみて考えることも多かった。

フィリピンでの著名な世界遺産である、コルディリエーラの棚田群には残念ながら訪れていない。



図8-1 パナイ島イロイロのミアガロ教会：筆者作図

## 9 シンガポールの世界遺産

シンガポールに所在する植物園が2015年に世界遺産に登録された。シンガポールには世界遺産に該当するような文化遺産はないと独善的に思っていたから意外であった。2016年夏にこの植物園を訪れた。

世界遺産に登録された植物園は植民地時代の1859年に開園し、19世紀中頃の熱帯植物園の顕著な事例であることが評価されて世界遺産になった、とされる。園内には、植民地時代の小建築が散在するが、公園としての世界遺産登録なので、園内の建築は特筆するような性格の建物ではなかった。公園を訪れてみると、シンガポールの子どもから大人、高齢者にも親しまれている公園であることが分かった。公園としての評価だけでなく、東南アジアの植物研究の中心となっている施設でもあるらしい。

開園した植物園で人々が憩う様子は『シンガポール 都市の歴史』に叙述がある<sup>40)</sup>。

### おわりにあたり

ワット・プーでの発掘調査に参加して以来、建物の様相を知るために芋づる式に、東南アジア・南アジアの遺跡、建築を見てきた。ある時は、手当たり次第見て回った。その結果、かなり多くの建物・遺跡を見てきて、多くの知見を得た。分からないことも多く、分からないことを全面的に解明するには力量不足で、端緒すらつかめていない。そこで気づくことの一端を列記し、まとめとしたい。未解明だと提示する課題は、後続する研究者が考察し解明していこう。

各国の現地語を理解できないので、読破すべき文献を読んでいない可能性がある。現地ではすでに研究が進んでいて、解明されている事柄があるかもしれない。もし、そうであれば浅学を御容赦願うしかない。

現時点で、私が課題と考えている諸点を順不同で思いつくまま述べていく。

#### 1) 宮殿や寺院で木造建築が広範囲に存在していた。

東南アジアの各地の広い範囲で瓦が出土するから、木造建築が広範囲に存在していたことは間違いない。民家などに継承されている木造とは違う系統の東南アジアでの木造建築の様相を解明することは大きな課題である。カンボジアやベトナム南部では、もともとあった木造建築が石造やレンガ造に変わっていて、石造やレンガ造なのに木造の造形が残っている。インドネシアやスリランカには、主堂を覆うような木造建築が存在したことを示す痕跡がある。

#### 2) この地域の瓦の系統には、少なくとも二通りある。

一つ目は中国からの系統で、二つ目はギリシャ・ローマからの系統である。

おおまかに言って中国系瓦は、現ベトナム北部・中部に出土し、ベトナム南部やラオス、カンボジア、タイなどはギリシャ・ローマ系の瓦である。類型を明確にするためにギリシャ・ローマ系と記述するが、インド・スリランカ経由で東南アジアに入ってきている、と想定されるが、インド、スリランカでの瓦の様相を示す研究蓄積が乏しく比較検討ができていない。

#### 3) 中国の影響の有無。

木造建築が広く多くあるが、中国・韓国・日本などに共通する組物を用いる架構は東南アジアでは認められない。ベトナムで現存する宮殿・寺院の多くがケオと呼ぶ斜め材で軒先を支持する架構で、この架構はベトナム独特の工法である。東南アジアの諸国が中国に朝貢を行っているのに<sup>41)</sup>、朝貢を行った国々の建築には中国の文化の影響はほとんど見られない。このことは、この地域の文化を考える上で大きな課題である。桃木至朗さんは、「朝貢はおもに国家間交易として、また民間貿易を円滑ならしめる手段」だったのではないかと指摘する<sup>42)</sup>。

#### 4) 中心性・求心性が不明確・乏しい遺構群は少なからずある<sup>43)</sup>。

#### 5) 規模を大きく見せるための工夫がある。

個々の建物一つ一つは大きくないので、組み合わせて群を造り、一つのまとまった大きい建築に見せるのである。石造・レンガ造だと、規模を大きくして覆う工法はアーチしかないが、東南アジアでは真正アーチは見られず、迫り出しアーチである。迫り出しアーチでは、管見する限りではアンコール・ワットの中央祠堂がスパン 6 m ほどと最大長の部類だろう。外見は砲弾型の造形になる。

#### 6) 未解明の遺構が多数ある。

現在の知見では、遺跡の様相から、往時の建物が想定できない遺構がある。クメール建築に限っては、論稿「アンコール遺跡群のうち、未解明の遺跡」にまとめた<sup>44)</sup>。

#### 7) 支配者の墓が明らかでない。

各地の支配者の呼名は、王であったり皇帝であったりするので、適宜支配者・王・皇帝と記述する。カンボジアではポストアンコール以降の王墓、ベトナムでは陳朝以降の皇帝墓は分かっているが、それ以前の王墓・皇帝墓は見つかっていない。ベトナム李朝の皇帝墓はハノイ近郊の天徳府に埋葬されたという記録が「大越史略」にあり、墓を造営していたこと自体は事実であろう。しかし、皇帝墓は確認されておらず、皇帝墓の重要さは東アジアなどと様相が異なる。インドネシアでは寺院（多くはチャンデイと呼ぶ）の中には、王墓となっている事例がある<sup>45)</sup>。ミャンマーでは、パガン朝時代以前の王墓は確認されていない。前述したように、東アジアとは異なる、



支配者の墓を造営しない文化、あるいは支配者の墓を重要視しない文化を持つ文化圏を考える必要がある。

#### 8) 文字史料が乏しく、考古学の調査・研究が欠かせない。

東南アジア地域の歴史の解明には発掘調査とその成果を深めることが欠かせない。しかし、この地域の発掘調査や、考古学の研究の蓄積は、まだまだ不十分で、今後の展開が期待される。今後の発掘調査の蓄積、考古学研究の深化は、東南アジア地域に新しい知見をもたらし、この地域の歴史をもっと豊かにしていくだろう。

タイのドゥバラバーティの都市遺跡<sup>46)</sup>は、整形ではないが全体として方形系の形状である。一方ミャンマーのピューの都市遺跡は、やはり整形ではなく、円形系と方形系の2タイプがある。またベトナム南部にはチャンパのほぼ整形で方形系の都市遺跡がある。こうした古代の都市遺跡が相互に影響しているのかいないのか、似ているのかいないのかなどなど、明らかにすべき課題がある。各国の発掘調査の実情は、未把握だが、調査が進み成果の交流が進展すれば、この地域の古代都市の様相を鮮明にしていくだろう。

#### 9) 遺跡の壁に表現される建築のレリーフ

クメール建築では、アンコール・ワットとバイヨンの回廊にレリーフがあり、多くの建物を表現している。また、インドネシアのボロブドゥールを始め、いくつかのチャンデイにやはりレリーフがあり、建物を表現している遺跡が多く存在する。これらのレリーフで表現された建物を網羅したデータベース、拓本・写真が、建物研究の進展には欠かせない。インドネシアのレリーフに着目した佐藤浩司さんの論稿<sup>47)</sup>や、銅鼓のレリーフについて考察した浅川滋男さんの論稿<sup>48)</sup>が発表されている。しかし、管見するかぎりでは、この地域の建築レリーフを網羅的・全体的に取り扱った研究は今のところ見当たらない。

建築型の土製品も、往時の建築を知る手掛になり、資料の収集と考察・分析は課題である。

#### 10) 歴史的町並みの保存

東南アジアには、歴史的都市・町並みとして世界遺産に登録されている、ベトナム・フエやホイアン、ラオス・ルアンパバーン、フィリピン・ビガン、マレーシア・ジョージタウン、タイ・アユタヤがある。また、歴史的蓄積を都市に色濃く残している、ミャンマー・ヤンゴン、カンボア・プノンペンなどがある。

生きている町・都市で、文化遺産の保護と地域の経済的展開、とくに観光開発はどこでも大きな問題となっている<sup>49)</sup>。訪問者の過度の増大や、いわゆる外部資本の流入など、さまざまに議論が行われている。経験交流は今後も必要であろう。

#### 謝辞

カンボジアでの遺跡観察の機会は、上智大学アンコール遺跡国際調査団の一員として参加して得てきた。団長の石澤良昭先生には、機会を与えていただいたばかりでなく、多くの御教示を得た、記して感謝する。カンボジア以外の東南アジア諸国や南アジアでの遺跡観察の機会は、肥塚隆先生を代表とする科研調査団に参加することによって得たことが多い。記して感謝する。本文中に記した方もいるが、タイでは故成田剛さんに、ベトナムでは、重枝豊さん、大山(旧姓)亜紀子さん、山形真理子さん、ファム・ティ・トゥー・ザンさん、インドネシアでは小野邦彦さん、

深見純生さん、カンボジアでは故荒樋久雄さん、ミャンマーでは渡辺佳成さん、寺井淳一さんに多くの示唆を頂いた。記して感謝する。

#### 注および参考文献

- 1) 例えば、オフィス・ド・リーブル編『アジア・美の様式 上下』（連合出版、上下とも1989）
- 2) 千原大五郎『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』（鹿島出版会、1982）
- 3) 上野邦一「ラオス・ワットプー遺跡の発掘調査」『アジア・知の発見』（クバプロ、1996）  
上野邦一「ワット・プー遺跡との二ヶ月—ラオスでの発掘調査と私—」『おもしろアジア考古学』（連合出版、1997）
- 4) 真正アーチとは、頂部に要石（キーストーン）を用いるアーチのことで、アーチと言えば通常はこの真正アーチのことをいう。コーベルアーチとは迫出しアーチともいい、構造体が覆う中央方向に向かって少し前へ出していく工法である。スパンには限界があり5mほどが最長であろう。スパンに対して高いと積みあげるのに有利である。ゆえに、外見が砲弾型の造形になる。
- 5) 上野邦一「クメール建築の誕生」『文化遺産の保存と環境』（朝倉書店、1995）
- 6) 注5に同じ
- 7) 『リビング・ヘリテージの国際協力』（文化遺産国際協力コンソーシアム、2008）  
国際シンポジウム『東南アジアの歴史的都市でのまちづくり』（文化遺産国際協力コンソーシアム、2017）
- 8) バンテアイ・クデイでの発掘調査については、下記論稿が詳しい。  
中尾芳治「発掘調査の経過」『アンコール遺跡の考古学』（連合出版、2000）  
中尾芳治「アンコール遺跡の考古学」『季刊文化遺産18』（島根県並河萬里写真財団、2004）  
中尾芳治「土を読む—バンテアイ・クデイ寺院跡の発掘調査から—」（連合出版、2005）
- 9) D02とはバンテアイ・クデイ内で認識できる遺構に付けた番号である。D02はD区の2番目という意味。以下D11なども同じ。「バンテアイ・クデイ建物一覧」（上智大学アンコール遺跡国際調査団、1997）参照。
- 10) 上野邦一「274体の廃仏の発掘と埋め方をめぐって」『季刊文化遺産18』（島根県並河萬里写真財団、2004）  
出土した仏像、発見の意義などについては『カンボジアの文化復興（19）』（上智大学アジア文化研究所、2002）が詳しい。
- 11) 上野邦一「半壊したラテライト建物の復元」『アンコール遺跡の考古学』（連合出版、2000）
- 12) 注5に同じ
- 13) 石澤良明『アンコール・王たちの物語』（NHKブックス、2005）P.249  
プリア・ヴィヘル地区に“10世紀初めのヤシャヴァルマン一世の治世の木造の寺院を建立していた”ことが碑文から分ると指摘する。
- 14) 軒平瓦が出土しない日本での古代寺院に飛鳥寺がある。  
『飛鳥寺 発掘調査報告』（奈良国立文化財研究所学報第5冊、1958）  
坪井清足『飛鳥の寺と国分寺』（岩波書店、1985）
- 15) 中尾芳治「土を読む—バンテアイ・クデイ寺院跡の発掘調査から—」（連合出版、2005）
- 16) タ・ケウの造営 Claude Jacques and Michael Freeman『Angkor Cities and Temples』（River Books, 1997）などによる。
- 17) 石澤良昭『〈新〉古代カンボジア史研究』（風響社、2013）
- 18) 崔 炳夏「アンコール建築のかたち」『アンコール遺跡の建築学』（連合出版、2001）
- 19) 西村幸夫「熱帯アジアの遺跡とその保存・活用—パガン遺跡を中心に—」『アジア・知の再発見』（クバプロ、1996）  
鈴木伸治「パガン遺跡の保存と問題点」『おもしろアジア考古学』（連合出版、1997）  
本文に記述したメンバーに加えて、インド・ネール大学から経済が専門の Amitabh Kundu さんがいた。
- 20) Pierre Pichard『Inventory of Monuments at Pagan I-V』（Kiscadale, EFEO, UNESCO、I:1992 II:1993 III:1994 IV:1994、V:1995）。VI巻もあるが手元にない確認できない。

- 21) 上野邦一「ラオスの建築、ミャンマーの建築」『世界美術全集東洋編12』（小学館、2001）
- 22) 上野邦一「ハノイの歴代宮殿跡の考察」『東アジアの古代文化123号』（2005）
- 23) 重枝豊「ベトナム・フエ王廟の保存修復」『世界の文化遺産を護る』（クバプロ、2001）
- 24) 山形真理子「三 林邑都城・チャーキユウ遺跡の調査」  
『岩波講座 東南アジア史 第1巻 原史東南アジア世界』（岩波書店、2001）
- 25) Tong Trun Tin ほか「The 1999 Excavation at Doan Mon Site (Ha Noi)」『Viet Nam Archaeology, Number 1』  
(Vietnam Academy of Social science, 2006)
- 26) 2008年11. 23-25 The International Conference on “The Identification of the Values of Thang Long Imperial Capital Site after 5-year Comparative Research (2004-2008)”
- 27) 『Thang Long-Ha Noi』(social sciences publishing house, Ha Noi, 2010)
- 28) 上野邦一「日本の古代都市における儀式空間についての予察的考察—漢字文化圏に南郊壇、社稷壇、太廟の事例研究—」『古代学 第3号』（奈良女子大学古代学術研究センター、2011）
- 29) 阿倍仲麻呂については、『安南志略』に「朝衝は日本人、開元年間に中国に渡り、中華風を良しとし名を朝衝と改め、官吏となって皇帝に仕えた。永泰二年に安南都護となり、その時、生蛮が徳化と龍武の二州を侵略したので、そこへ赴き平定した。」という記述がある。
- 30) 『東大寺要録 巻二』に大仏開眼供養の様相を記述する。
- 31) 建築土製品は、ナムデイン省、タイビン省、クアンニン省、バクニン省、ハイ・ズオン省の博物館にあり、いずれも13-14世紀のものとしてされている。これらの土製品については『タンロン皇城遺跡の保存活用に関する包括的調査研究』（研究代表者 清水真一、2012）に紹介されているし、友田正彦、清水真一「ベトナム北部出土の建築型土製品における屋根瓦の表現」（2013年日本建築学会大会報告）、などの報告がある。
- 32) 江上幹幸「インドネシアのピラミッド」『東南アジア考古学最前線』（クバプロ、2002）
- 33) 主堂、副堂は仮称である。大きく中心と思われる建物を主堂、主堂と一体となって配置されていて、主堂より小さい建物を副堂と記述している。主祠堂・副祠堂という名称も定着しつつあるが、祀る物体をおかず、祠堂の名がふさわしくない場合があると考え、主堂・副堂とした。
- 34) 上野邦一「建築・建築群の中心性・求心性の考察 その1」『南アジアおよび東南アジアにおけるデーヴァラージャ信仰とその造形に関する基礎的研究』（大阪大学大学院文学研究科、2013）
- 35) 深見純夫さんの指摘による
- 36) 佐藤浩司「描かれた家屋」『世界美術全集東洋編12』（小学館、2001）
- 37) 千原大五郎『インドネシア社寺建築史』（日本放送出版協会、1975）
- 38) 注2に同じ
- 39) 『フィリピン共和国調査報告書』（文化遺産国際協力コンソーシアム、2014）
- 40) マヤ・ジャヤパール著、木下光訳『シンガポール 都市の歴史』（学芸出版社、1996）
- 41) 深見純夫「マラッカ海峡交易世界の変遷」  
『岩波講座 東南アジア史 第1巻 原史東南アジア世界』（岩波書店、2001）
- 42) 桃木至朗『中世大越国家の成立と変容』（大阪大学出版会、2011）
- 43) 注34に同じ
- 44) 『カンボジアの文化復興（29）』（上智大学アジア人材養成研究センター、2016）
- 45) 『インドネシア古代王国の至宝』（インドネシア、日本友好祭’97事務局、1997）
- 46) 中村慎一編『東アジアの囲壁・環濠集落』（金沢大学文学部考古学研究室、2001）
- 47) 注36に同じ
- 48) 浅川滋男「西南中国及び東南アジアの青銅器文化における家屋模型」  
『奈良国立文化財研究所 第四十七冊 研究論集Ⅷ』（奈良国立文化財研究所、1989）
- 49) 注7に同じ



※ 前述以外に本稿で参考とした文献、主に建築・遺跡関係のみ

加藤祐三編『アジアの都市と建築』（鹿島出版会、1986）

Janice Stargardt 『The Ancient Pyu of Burma』（Pacsea Cambridge,1990）

Nancy A. Winter 『Greek Architectural Terracottas』（Oxford University Press,1993）

神谷武夫『インド建築案内』（TOTO 出版、1996）

『アジア・知の再発見』（クバプロ、1996）

石澤良昭編『おもしろアジア考古学』（連合出版、1997）

上野邦一「アンコール建築の石工たち」「レンガや木を構造にもちいるクメール建築」『アンコール遺跡の建築学』（連合出版、2001）

『世界の文化遺産を護る』（クバプロ、2001）

『東南アジア考古学最前線』（クバプロ、2002）

布野修司編『アジア都市建築史』（昭和堂、2003）

上野邦一「遺跡に残る痕跡が語る」『アンコール・ワットを読む』（連合出版、2005）

「カンボジアの文化復興」（上智大学アジア人材養成研究センター）

上野邦一『建物の痕跡をさぐる』（連合出版、2010）

上野邦一「クメールの前近代的都市について」『古代学 第4号』（奈良女子大学古代学学術研究センター、2012）